大日本世界教要義 第一卷

川面凡兒口述
新村樂水筆記

東京 稜威會

252
393

013715-000-9

特18-686

大日本世界教要義 第1巻

川面 凡児/著

M39

ABA-0190

特18
686

棲威會ヨリ寄贈本

引

樂水、先生と相識る已に久し、先生は夙に宗教哲理の研究に献身しつゝありき。然れども、其の問題の何物なるか、又その如何なる宗義哲理なるかに至つては、假にも之れを口にせらるゝことなし。昨年十一月菊花の頃、谷中の蕭酒舍に先生を訪問しぬ、うづ高き原稿を指示せられ、是れ凡兒が二十餘年來の研究に得たる結果なり、時至らば順次上梓して、天下に宣明せんとすと。茲に初めてその說の一端を說明せらる。示來余は先生に師待す、間を見、隙を得て、教趣を聽聞したり、その廣大崇嵩にして甚深精妙なる、とても無學無識なる余は俄に咀嚼會得すると能はず。このごろ更にその大略の教趣を求めて概說せらるゝを聞き、少しく會得する所あり、快哉に堪ねずと維、健忘性なる余は或は之を忘却せんことを恐れて心覺を覺束なくもノートブック筆記し置きたり。近頃友人某某に示す、皆曰く乾坤の珍書なり、講義筆記ともして上梓發行せば如何と、之を先生に乞ふ、許を得て、更にその中の數節を上梓することゝ爲しぬ、是れ固より全き者にあらず、唯だ人生宇宙の根本問題を解決したる一の概論畧說たるに過ぎざる者とす。先生さきに大日本世界宣明書第一書第二書を發刊してその立脚を世に示さる。只宣明書中の本体大本體なるものは本篇講義に於て、初めて其一端を說明せられたり。余の微衷、世の全神教を研究せらるゝ諸彦にして、彼此對照しつゝ其の研究の一助ともなることを得ば、幸甚爾

先生このごろ某に贈りたる翰墨あり、我徒同人社中の立脚を明にするものあれば左に掲出し、世の同好の人々に告ぐと云爾。

明治三十九年夏六月午廿八日

新村樂水識

月花をながめつる身のいかなれば

神ましますをしらであるらむ

稜威會同人手翰

拝啓、他をば糞蛆の如く睥睨し、傲然獨り自己を標榜し、我は是れ神也佛也、使徒也、覺者也と叫ぶ者ありとせば、是れ如何なる所存にか候ひつらむ、其人にして神也佛也とせば他も亦神也佛也、恰も其者人間なれば他も亦人間也、人間か人間に向ひて、我は是れ人間也と叫ぶの必要ありや。自他均しく之れ神たる神にして、我は是れ神也と叫ぶは、自他共に人たる人にして、我は是れ人間也と辨ずるに同じかるべく候。思ふに其等は今に初めて人たることを知り、神たることを自覺したるにやあらん、さりとは喜びて我のみ獨り人間也神也と叫ぶ者にて候ひつらん、氣の毒の至に御座候。然れどもろの人たるとを知り、神たるとを知りたるは、猶且知らざるに勝るべく、御仕合せ者と可申候。その亦古人に比して、釋迦何人ぞ、基督何人ぞ、彼れ人なれば我も人也、彼れ神なり佛ならば、我も神なり佛なりと云ふこと最もなる次第に御座候。釋迦も基督も人の子也、摩耶の子也、マリヤの子也、彼れ亦母あるべく候。例へば大臣も大博士も人の子也人間也、乞食も人の子也人間也、乞食曰く我は人の子也、人間也、大臣博士も人の子也人間也、彼我同一人間なりと叫ぶ乎。いかに大臣博士なればとて、乞食は人間にあらずとは否定するを得ず、均しく是れ人の子なり人間たるに相違なければ也。更に曰くその同一人間たるからには、今は乞食なれども、慷慨憤を發して勤行

する所あれば、大臣なることを得、博士たることをも得べしと叫ぶも、亦之を得ずと否定するの大臣博士なかるべく候。眞實に慷慨憤を發して勤むる所あれば、大臣たり博士たると不可能の事にあらず候。然れとも、それは勤め行ふたる後にあらねば判然せず、結果に依りて後に判然することに有之候。未た勤めず行はずして、我は大臣也、博士也、同一人間たるに於て、何等の別ありやと叫ぶも、世間は之を信せず候。大臣としては大臣たる結果を顯はし、博士としては博士たる結果を顯はして後にこそ、大臣たり博士たることを得る者に有之候。人間たる原因を同ふするが故に、其の原因をば發揮せず、教育經驗事業等の歷史的結果をば顯はさずして、大道に横行し、我は是れ大臣たり博士たりと云ふも、異な者にて有之候。さりとは却て乞食根性の失せざるを憐むべき次第に御座候。世間何人も釋迦基督等と同一の人也神也佛也、何人も釋迦基督丈の勤行を爲せば、釋迦基督たるとを得るのみならず、それ以上の勤行を爲せば、それ以上の者ともなることを得べく候。然れども、それはそれ丈の歷史的結果を顯はしたる後に有之候、未だその歷史的結果を顯はずして、その人たり神たり佛たる原因のみ同一なるを以て、直に我は神也佛也と叫ぶも、世は之を信せざるべく候。その人たり佛たり神たるの原因は、均しく何人も之を保有致居候。而も何人も未だその歷史的結果をば發揚し得ざるが故に、その結果あるの人を見ては、初めて神也佛也使徒也覺者也と信ずる次第に御座候。されば、人の世にある人にして、我は人也と叫ぶの必要あるを見ず。唯その人たる道はいかに實行すべきか、先づ其道を覺る者は、未だ覺らざる人々に告げつゝ、共に之を究め、之を行ひ、與に以て人たるの全き歷史的結果を顯すこと古人の如くなるべく、更にそれにもまさるべくありたきものに候。均しく之れ神たり佛たる身にして、特更に我は是れ神也佛也と叫ぶの必要なく、唯その神たり佛たるの實は、いかにして之を實行すべきか、先づその敎を覺る者は、未だ之を覺らざる人々に告げつゝ、尙も相供に之を究め之を行ひ、與に以て神たり佛たるの全き歷史的結果を顯はすこと、古人の如くなるべく、更にそれにもまさるべくありたき者に候。未だその實あるなく、而も獨り自已のみを標榜し、傲然として、我は是れ神なり佛なりと云ふは、氣の毒の至に御座候。

さればとて、亦釋尊は天上天下唯我獨尊なり、基督は眞の神の獨子なり、佛なり神なり、人間の敢て企て及ぶべき所にあらずと云ふ者あらば。是れ亦いかなる所存にかありつらむ。釋迦にして唯我獨尊の境に達することを得ば、亦何人も唯我獨尊の境に達することを得べし、耶蘇にして眞の神の子たることを得ば、他も亦眞の神の子たるを得べく候。釋尊は唯我獨尊と云ふはよし、基督は眞の神の子也と云ふもよし。然れども、其獨尊たると獨子なるとは、獨り釋迦に限り、獨り耶蘇に限りて、他は決して企て及ぶべき者にあらずと云はゞ不可にて候。もし釋尊は獨尊也、佛也、基督は神の獨子也神也、他は凡夫なり罪人なり、斷して及ぶべからざる者也とせば、是れその釋尊

基督は、人間の模範とすべからず。其説く所の法と教とは、人間の實行し得ざる者となるべく。人間として、とても及ぶべからざる法と教とは、そのいかに高尚幽玄なりとするも、人間には要なきに至るべく候。是れ果して釋尊基督の心なるべき乎、疑はしき次第に候。いかに佛の化身たる釋尊なりとて、いかに神の獨り子なる基督なりとも、其説く所は必ず人をして實行せしむる者なるべく。實行すれば、必ずやそれ、我の如き佛、我の如き神の子たるとを得べきものぞと示したる者なるべく候。されば釋尊も基督も均しくその先づ凡夫の位置をは修行して正覺の佛果を得、人の子より修行して神の子となりたる模範を垂れたる者とこそ被存候。かくてこそ何人も其法を學びもし、其教を聞きもし、更に之を實行して、正覺の佛果を採り、神の子となるとは志すものに有之候らへ。惜むらくば末派末流の徒、一に唯その法と教とを天上天下唯一のものとして、我が所有たらしめんとするより、あたら、其開祖をも亦餘りに高く莊嚴して、生なからの佛、生なからの神たらしめんとこそはするに至れりぞや。何故に父大工の手間を助け、何故に豫言者を師として洗禮を受け、何故に猶太是れ却て其法其教に戻りたる者とこそ被存候らへ。

果して唯一の佛、唯一の神の子たらば、何故に人の腹をかりしぞ、何故に天より光の風に御して天降り、淨土より紫雲に乘じて世には出でざりしぞ。何故に印度の當時の教育を受け、時の仙人等を師保とし、何故に苦行し、何故に金剛座上に正覺を取りしぞや。何故に父大工の手間を助け、何故に豫言者を師として洗禮を受け、何故に猶太

の感化を受けしならむ。更に何故に當時印度以外に於ける法をば說き、猶太以外に於ける福音をば傳へざりしぞ。且何故に世界列國の言語を以て、均しく世界列國を其法と教とに導かざりしぞ。見よ、其説きし法を尋ぬれば、當時の波羅門教より解脫して一步を進めたるに過ぎず候。其の示したる教を究むれば、當時の猶太教より解脫して、一步を進めたるに過ぎず候。御釋迦樣も耶蘇樣も、均しく之れ其生國の遺傳習慣に教訓せられ、四圍の境遇に感化せられたることは爭ふべからざる次第に候。是れ均しく人の子なり凡夫なればにて候。然れども凡夫なるが故に憤を發し、人の子たるか故に神子たるを期し、献身盡瘁して修行煅煉したる結果は、當時流布の法より教より、更により多く之を啓發進步したるに有之候べく、彼等の歷史は實に均しく之れ人間としての現はれ出て、人間として勤め行ふたる結果に過ぎず。初めは均しく凡夫にして、人の子にして、その凡夫たり、人の子たるに安せず、更に刻苦盡瘁して勤め行ふたる後に正覺の佛となり、神の子となりたる者に有之候。初めよりして正覺の佛たり、神の子たる結果を顯し居りたるには無之候。されば後世亦刻苦盡瘁して彼の如く勤め行ふて怠ることなくば、何人と雖、その歷史相應の結果につれたる正覺の佛となり、神の子となり得べきものにて候。獨り釋迦基督に及ひ得るのみにあらず、それにも勝る歷史的結果を顯すに至らば、更に釋迦基督にも優る、より以上の佛となり、より以上の神ともなることを得べきものにて候ひつる。今日は狹き印度にあらず、小なる猶太にあ

らす候、世界通じて一國たり、その遺傳歷史は一隅に止るべくもあらず。昔日の印度を救ひ猶太を救ふの比に非ず候。而も彼等は昔日にその狹き印度、その小なる猶太にありてすら、猶且人の世を救ひ更に大千世界をも救ふを期し申候、其意氣の雄壯に、その顯行の廣大にして、更にその慈悲博愛の念に富むとの甚深無限なると、それ如何ぞや。而も今日世界列國を通じての一國たる觀地に生れたる世の人人の覺悟は如何に候らいつらむ、採つて以て模範とするには足らざるか。

我等同人は固より凡愚にして敢て及ぶ所にあらず、而も及ぶ所にあらずとして自棄棄するは非なるべく候。凡愚なるが故に、其及び得る限りは、根限り性限り人の人たる道、神の神たる道を求めて已まざると共に、求め得たる限りは、その大小を恥じろうの邊なく、少しづゝにても、身に念ひ身に云ひ身に行ひつゝ、我等と共に、その愚を同ふする者には、亦共に念ひ共に云ひ共に行はんとする所存に有之候。而して更にその大なるものに達せんとする所存に御座候。迂愚なる同人どもなれば、其念ふ所、言ふ所、行ふ所は、固より足らはぬ所多かるべく候。その足らざる所を敎ゆるは世の仁人君子也。我等か大日本世界敎を主張するは、自他救濟の爲めなると共に、亦世の賢明なる人人の更に大なる敎を示して我等天人萬有を救はれんことを促がすの請願督促にも有之候　以上。

三十九年丙午六月六日雨梅の天

東京谷中　稜威會同人拜

全神敎趣 大日本世界敎要義第一卷

第壹章　大日本世界敎の名稱……一

第貳章　東西古今の宗義學說……二

第一節　庶物敎と欠陷……二

第二節　多神敎と欠陷……四

第三節　一神敎と欠陷……七

第四節　自然神敎と欠陷……一二

第五節　萬有神敎と欠陷……一三

第六節　汎神敎と欠陷……一五

第七節　無神敎と欠陷……一七

第一段　怪疑說と欠陷……一七

第二段　自然說と欠陷……一九

第三段　物質說と欠陷……二三

第四段　理性說と欠陷……二五

第八節　偏敎と欠陷……二六

第九節 佛教と欠陷……二八
第參章 將來の宗教……四五
第四章 全神教立義の前提…(第一)……四七
第十節 宇宙萬有の一体……四七
第十一節 客觀よりの吟味究明……四九
第十二節 主觀よりの吟味究明……五〇
第十三節 主觀客觀超絶よりの吟味究明……五〇
第一段 兩觀超絶後の大客觀的落在……五一
第二段 兩觀超絶後の大主觀的落在……五五
第十四節 各自一端の解釋……五六
第十五節 本体現象の誤解……五七
第十六節 主觀的平等と客觀的差別との一体……五七
第十七節 平等差別の生ずる所以と相互の主觀客觀……六三
第十八節 本体と英靈……六三
第十九節 萬有相互の兩觀と現象及時間空間……六四
第二十節 一方面解釋の結果と人生に及ぼす弊害……六七
第二十一節 無我利他主義の誤解と弊害……六九
第二十二節 自我利己主義の誤解と弊害……七二
第二十三節 古今東西宗教學說誤解の由來……七六
第五章 全神教立義の前提…(第二)……八四
第二十四節 有形無形の根本……八四
第二十五節 心肉不二一体と無機有機の不二一体……八五
第二十六節 心理物の發顯點と古今誤解の本源……八八
第二十七節 本体と大本體との解釋……九二
第一段 半面の平等と位置中心及主觀大主觀的神と太神……九三
第二段 中心四圍の主觀大主觀と差別的半面及客觀大客觀的質量の中心四圍……九六
第三段 大本體本体現象及太神英靈萬有……九八
第四段 時間空間と宇宙の四圍及無始無終非有限非無限……九九
第六章 東西古今の宗義學說と全神教との關係……一〇四
第七章 全神教……一〇九
第八章 大本體としての尊稱……一二〇
第九章 信仰……一二九

第二十八節　根本信仰……一二九
第一段　向上致一の信仰……一三〇
第二段　向上相對の信仰……一三一
第三段　向下相對の信仰……一三一
第四段　向上超絶の信仰と究明的致一……一三一
第五段　向上超絶の信仰と不究明的致一……一三三
第二十九節　向下の信仰……一三四
第一段　向下表徳の信仰……一三四
第二段　向下劣等の信仰……一三五
第三十節　他律的信仰……一三五
第三十一節　自律的信仰……一三七
第三十二節　他律中の自律信仰……一三八
第三十三節　自律中の他律信仰……一四〇
第三十四節　信仰と人生の行道……一四一

大日本世界教要義第一卷

川面凡兒口述
新村樂水筆記

第一章　大日本世界教の名稱

大日本世界教と名稱ましたのは、大日本皇國より世界を統一せんとするが故に、大日本世界教と云ふのであります。世界を統一すると云へば奇妙に感せらるゝでありませうか、其れは全神教と云ふ全き神の教を以て、世界を統一主宰せんとするのであります。全神教を以て世界を統一せんとすれば、大不例頗世界教と名稱す可きであります。全神教とは、獨り大日本國にのみ專有すべきものでなく、世界列國共通のものである今は大日本皇國より唱ふるが故に「大日本世界教」と名稱するのであります。（大日本世界教

（宣明會第十五章第七十七條參看）ソコデ、全神教とは、如何なる教趣ぞと云ふに、全き神の教と云ふの て、今日迄の東西古今の宗教宗教は、各々其一端を説明したるものにして、未た全き神の御教を説明し得たるものがなひのであります。

第二章　東西古今の宗教宗義

第一節　庶物教

これはいづれも世界列國の古代に發現りたる信仰である。古代は何れの國も其智識感情意思の發動と經驗歴史との乏さが爲めに、風雨雷電地震等の現象を見ては、不可思議なる思惑を發し、その人間の所爲と異ことの甚だ奇異なるを以て、天を仰ぎ地に伏しては、その由て來る所を察せんとするも、幽玄にして測り知ることが出來ない、それゆゑ、之れ人間の所爲にあらず、全く神の所爲であると感想し、遂に風雨雷等を以て直に神なりと尊敬し、その感想を推擴めて、苟も人間の所爲と異るものは總て神なりとし、果は奇巖古木、妖禽怪獣等迄も神なりとして、之を祭祀り之を尊敬した者であります。人生宇宙は、總て神より發顯したるものなるが故に萬有一切――ありとあらゆるものは――總て神なるに相違はありません。然れども、唯だその人間の所爲に異なる處があるから、奇巖古木妖鳥怪獣迄も、神なりとして之を尊敬し、その人間に優たる者とするは、誠に幼稚なる感想、劣等なる信仰と云はねばなりません。是等は劣等なる信仰の發顯れたる者であります。するが故に、未だ以て人類としての滿足すべき信仰ではありません。これは恐怖の念より發したる信仰てはありません。恐怖するのは、その對象たる風雨雷電の何物たることが判然せざるより起る念想でありまして、未だ我と彼と――崇拜する對象其的――との一致すること能はざる信仰であります。故にこれを祭祀するとも我が心には充分なる慰安を得ることが出來ません。かやうなる恐怖の念より發したる信仰は、未だ以て全き神の教とするには足らぬ次第であります。

ソコデ、一寸申ておきますが、信仰と云ふことを假りに二つに分けるとすれば、信仰の主體其的を充分に吟味せずして、又彼我一致することも能はざる對象物を崇拜する

信仰を向下の信仰と云ふ、世に謂ふ所の迷信であります。信仰の對象たる主體其的を
よく吟味して判然たらしめ、而して後主觀客觀に於て彼我一致すべき所の的を崇拜
する信仰を向上の信仰と云ふのであります。（これは本論末尾第九項信仰の處にて委細述べます）

第二節　多神教

世界列國とも人智と經驗とが次第〳〵に發達するにつれまして、風雨電雷等が直々神
ではない、これを主宰する所の的があり、其的が雨を降らし、風を起し、電雷をな
らし、光からかすものである。それが即ち神であるとて、これを祭祀り、之れを尊敬
たものであります。この時代に於ても、その人間に異る所爲を神とすることは。依然
として、變りませんでした。故にその人間に異る所爲を爲すものは總て神なりとして
先祖崇拜、英雄崇拜の感想を發すると共に、其の祖先又は英雄の死したる後は均しく
其魂魄を神として祭祀るの信念が發したものであります。祖先を神として之れを祭り
之を尊敬するは、その在世中の勳功を讃美しつゝも、子孫は遠きを追ひ終を愼むの道
を自然と實行たものであります。英雄崇拜の如きは幾分か恐怖の念うすらぎ、我と彼
との一致する所の信仰て、胸中聊か慰安を得たものであります。獨り祖先崇拜の如き
は、全く恐怖の念なく、明かに其對象物の何的たるかを勘辨した後の信仰であります、
言葉を換て言ば、祖先は我々の祖父たり父たる人にして、死して神となりたるものな
れば、吾等も死すれば均しく神となるものであると云ふことを勘辨したる後の信念で
あります。故に我と彼とは一致したる信仰にして、初めて恐怖の念を去りたる慰安を
得たるものであります。ソコデ、この祖先崇拜の如きは、最も尊む可き報本反始の道
てありまして、人間としては缺べからざる道であります。祖先が代々その智識感情意
思の配慮と經驗歷史とを發達して、之を子孫に遺傳相續したれはころ、今日吾人々類
は文明的生活を見るに至つたものであります。その人生に貢獻したる勳功は、世界列
國とも實に偉大なるものであります。吾等は之を稱讃するに如何なる言葉を以てすべ
きか、頌德詞を發見することが出來ません、せめては、之を祭祀りつゝ其遠を遂ひて
之を尊敬しつゝ其の終を愼むことは、後世子孫として、其の始に反り本に報ゆるの道

てあると共に、又吾々が吾々の子孫を啓發すべき社會的發達を祖先のそれの如く相續道傳せねばならぬ次第であります。此多神敎は埃及にも亞剌比亞にも、殆ど、世界列國到る所の古國には發達したるものでありますす。多神敎とは庶物敎の進歩したる者であります。其後、猶太敎基督敎、回々敎等の流布するにつれ、歐米諸國に於ては今日、殆とその跡を斷ちたるの國は少なからぬ有樣であります。獨東洋に於ては波羅門敎、佛敎等の多神の存在をゆるし、儒敎は、全然祖先敎なるが故に、印度支那等の諸國にのみ其命派を保ち居る次第であります。然れども多神敎には色々さま〴〵の分子が混合つて居りまするから、その信仰が向下して、殆と世に云ふ所の渾沌的迷信に陷りて居ります。獨り大日本皇國のみは、純粹なる多神敎として、最もよく發達しつゝあります。唯その中流以下に於ては、色々の分子が混合いたしましたが爲めに、支那印度等に於けると一般、その信仰の渾沌的に向下しつゝありまするのは、實に嘆しき次第であります。

世界列國とも、多神敎としては、その多神を統一主宰する所の神がありません、たゞ〳〵ありとすれば、其統一主宰する所の神としての成格が判然として明かに發達して居らぬから、從て其神とする對象の何物なるかをも吟味せずして、無暗矢鱈に何でもかても神として拜しまするが故に、遂には庶物敎同然に恐怖の念も混じ、慾望の念も發して、狐でも狸でも猫でも蛇でも祭祀ると云ふやうなる最も劣等なる缺陷を生じた所以であります、されば多神の存在を容すとすれば、勿論、統一主宰の一神がなくてはならぬ筈であります——神としては、最も靈あり力あるの神ならざるべからず、最も靈あり力あるの神は、唯一無上の神でなくてはなりません——希臘の如き、印度の如きは、早くこゝに思ひ附て、唯一の神を唱道したものがあるのであります。然れども唯一の神としては、其の一方にみの發達いたしましたものは猶太敎基督敎回々敎であります。

第三節　一神敎

されど猶太敎基督敎回々敎は、唯一の神と云ふことに、餘り力瘤を入れ過たから、多

神の存在を容さないやうになりました。若し多神の存存をゆるさないとすれば、一神の實在もなくなるであります。一とは多に對したる名稱にして、双對の言葉で、もしその多と云ふことがないとすれば一と云ふことも成立ません、即ち一と云ふ數は二と云ふ數ありて初めて知らるゝもので、三と云ふ數は一と二との數ありて明かなるが如く、又二の數は一と三との數を待て其働きを顯すものであります、若し一の數のみなれば何等の働きも顯すことは出來ません、神其的のみなれば神は何事を致しますか、神としての自性をも顯すことは出來ません。神としての自性を顯すのは、萬有を發顯すからである、萬有を發顯すことが出來なかつたならば、神は神としての神たることも能はぬものであります——彼等は神は宇宙萬有を造りたりと云ふ——然らば神より發顯れたる萬有は均しく神でなくてはならぬ。之を區分すれば神は本體にして萬有は現象である。本体が神なれば　現象も神である、本体の神と現象の神と相對してこそ働くものであります、一方を除きては一方は立つことは出來ません。それて本体の神が尊ければ現象の神も亦尊ひわけであります。然るに猶太教基督教回々教に於ては

神は尊ひけれども萬有は賤しきものであると見て居るのであります、これが間違です、萬有は神の働きの狀態で、この狀態がないならば神の尊び所もなくなります。この神の狀態は（萬有の活動狀態）神其的の働きの狀態てありません、神より出てたる萬有は皆神なり、故に本体の神を拜むと同時に又た現象の神をも拜さねばならぬ次第であります。現象の神の內にも人生宇宙に貢献したることの最も直切なる功を顯はしたる聖人君子義人烈婦の如きは、神の働きの內にも最も働きある神として拜さねばならぬ譯であります。且その神は宇宙萬有を造りたりと云ふに於ても、神は宇宙萬有の外にありとする說であります。世に之を超在一体教と申ます。もし宇宙の外とは何ぞと問へば、そは神秘なり不可思議なりと申ます、不可思議とは思議すべからさるものであります、さりとは前後矛盾の教義であります。唯一の神を唱道する猶太教基督教回々教等のその教に欠陷の多々ある中にも是等は大なる欠陷であります、即ち一方面のみの說明にして未た全き神の教とするに足らぬ教であります。特

に基督教の三位一体説の如きは、更に缺陷ある中の大缺陷であります。何となれば基督のみが神の子にして眞の神の子にして、他は眞の神の子でないと云ふことは、古代智識情感の未だ幼稚なる時代に於てこそ、偉人を恐怖尊敬する念よりして、かくは主張し、かくは尊敬したるものなるべきも、それは三千年以前智識情感經驗等の發達せざる時代である、而も三千年以後の發達せる今日に於て、依然之を應用せんとするは餘りに迂闊千萬なる所爲ではありませんか、均しくこれ人間にして、基督のみが眞の神の子であつて、總ての人類は眞の神の子でないとすれば、總ての人類は僞りの神の子でありますか。さりとは、神の成嚴を損します。又神の獨り子とも云ふべき基督を何故に夫ある妻に向て、夫の知らさる間に宿りて、その夫に姦通たることを疑はしむるに至りましたか。疑はして更に神がその夫の夢枕に現はれ、彼は姦通したのではない精靈の宿りたるものなりとの辨解的方法を採りましたか。其程尊き神の獨り子なれば、何故に一天萬乘の太子として產れ出つるか、左なくば夫なき處女――能ふべくんば人類の所爲に異る神の所爲として――寧ろ十歲位の處女の腹を選ばざりしか、否、寧ろ天より直に天降して人の腹などを借りない方が、神として最も尊き所爲ではありませんか、神がこゝに出でずして姦通の辨解をなすが如きは是れ姦夫姦婦の所爲であります、人類として最も劣等なる所爲であります、此が人類の摸範とせられますか、かゝる劣等なる所爲に出つるとは、神としての威嚴を見ることは出來ません。この點に於ては如何に彼等が辨解をなすとも決して神としての威嚴を保つことは出來ません。全然奇蹟とするには足りません、寧ろ私生兒としても信神の念と行とのあれば、神となり、教祖ともなることを得るものゞ、ましてその父その母の正しき兒等は勿論の事なりとの神話を世に示すこそ、却て神たるの威嚴があるのであります。私生兒なりとて其兒に罪はありません。神より發顯したるものは總て神であります、人類は悉く神の子であります、眞の神の子であります、基督のみ獨り神の子と云ふことは成立ません。故に「ユニテリアン」の如きは、この三位一体説を脱却んと苦心しつゝあるではありませんか。殊に「三位一体説」とは羅馬に至りて始めて起りた説であります。基督の位置を疑ふ者多き結果、其宗教大會に於てこの説を決し、基督の神聖を擁護したも

のてこそあります。兎に角、基督教としては其根本に於て大なる欠陥が多々あります
るから其より分れたる諸教派は總て其欠陥を脫却れることが出來ません、「ユニテリア
ン」の如きも其の一てあります。（基督教諸教派に渉りては本論天照大神宮に委細に其欠陥を論斷してあります）

第四節　自然神教

サテ、世界列國とも、この一神教と多神教との爭は、古より今に至るまで相續して居るのてあります、歐米に於てはこれを調和せんが爲めに、一神教よりは自然神教と云ふものが起りました。一神教としては人生宇宙の總てを神が造りたるものにして、神は萬有一切を主宰するの全權全能を有し、萬有は少しも其の間に自由意思を有せざるに歸着します。然るに自然神教としては神は萬有を造りたるものなれども、造りたる後は、最早萬有其物を悉く主宰すること能はずして、萬有は萬有としての自然法則を有して行動するものてあると云ふことを主張致します。これ神の權能と萬有の權能とを兩立せしめたるものにて、幾分か多神の存在を容すことに到達致します。又一神教は神は人格を有するものと信しまするが、自然神教は嚴格なる意味を以ての人格あるものとは信せません。さてこの自然神教は甚だ曖昧なる立義てありまして、神が萬有を作りたる後は、萬有は萬有としての自然法則ありとすれば、神は過去の遺物となり現在に於ては直接なる關係なきものとなります。而して人格てなければ人格でないと云ふ判然したる說明がありません。又自然法則と云ふものが如何にして發し何なる成格なることかも說明がありません。更に多神としての存在を明かに說明はせず來るものか其の理由の說明もありません。その立論の歸する所は多神の存在をゆるす如くにもなります。コレデハ未だ欠陷多くして一神と多神との調和は成立つたものてありません。

第五節　萬有神教

これは印度にも歐米にも一神と多神とを調和せん爲めに――寧ろ調和と云ふよりは一神と多神とを一致したるものとして立義主張する所の教て、古より今に至る迄說明せ

られつゝあります。その主張する所は「宇宙が神であつて神が宇宙である」と云ふのであります。ソコデ、神と宇宙とは何れが主であるかと云ふ議論が起りまして、神を主とするものと宇宙を主とするものとの二派に分れました。宇宙を主とすれば、神は従となりますから、神そのものを認めざる無神論に歸着致します。又神を主とし宇宙を従としますれば、神のみにして宇宙を認めざるに至ります。同一の萬有神教でありながら、此の如き反對の觀あるに至るは、をかしなものであります。ソコデ、更に嚴格なる哲學的見解が發しまして、神と宇宙とは一体のものであつて、主從に區分すべきものではないと云ふ不二一体の萬有神教となりました。然れども、宇宙と神とが一体なりとすれば、其一体たるものは何物か、これには何と名稱すべきか、神と名稱せざれば宇宙と名稱せねばなりません。神と名稱すれば、神のみにして、神は何ごとをも成し得ざるものとなります。宇宙と名稱すれば、その宇宙の四圍は如何なるものであるか、又神としても、其の四圍は如何なるものなるか、彼等は未だ其說明をなすことが出來ません。唯だ無限なり無邊なりと遁辭するに過ぎないのであります。若し無限なり無邊なりとすれば、神は神自身をも知ること能はざるに歸着するのであります、面貌を有せざる妖怪となります。これ萬有神教としては大なる欠陷であります。然れども、この欠陷は、獨り萬有神教のみでなく、唯一神教も、自然神教も、佛教も、將た古今東西の哲學者も理學者も化學者も、悉く皆說明すること能はざる所の欠陷であります。

第六節　汎神教

萬有神教でも自然神教でも、一神教と多神教との調和は充分に成立ませんから、近頃に至て汎神教なるものが現はれたのであります。これは神は萬有の内に存ずると云ふ說で、世に之を「内存說」と申します。假令ば、神は人間によりて初めて神あることを認む、言葉を換へて言へば、神は人間となりて後に初めて神のあると云ふ事を知るものである、即ち神が人間の内にあると云ふ意味なると同時に、神は總ての萬有の内に存在して居るものであると云ふ說よりして、萬有は總て神なりと申すのであります。

然らば若し神が萬有の内にありとすれば、萬有の外は如何であるか、彼等は内のみを説明して、未た外を説明することが出來ません。外に向ては單に無限である無際であると云ふのみであります。而して唯一神教の「稱ふる神は宇宙萬有の外に超在して、人間の思議すべきものでない、即ち超在一体教でありとする説」に向ては、之れを駁斥して思議すべからざるものは神秘であると、神秘説は人間としては取るに足ざらる妄信であるとまで申して居ります。然れども、内存説たる汎神教と云へども、萬有の外は無限なり無際なりと云へば、是れ内のみ明かにして、依然その外は不明瞭であります。さすれば萬有神教と一般面貌を有せざると共に臘府のみの妖怪であります、神秘説と妖怪説とは相去ること幾千の差もありません。更に萬有神教も汎神教も宇宙は神なり萬有は神なりとすれば、森羅萬象何れも皆神にして、進むも神、退くも神、善人も神、悪人も神、總て何有も神にして、均しく之れ神なれば、善をせねばならぬと云ふこともなく、悪をしてはならぬと云ふこともない。進まねばならぬ、退てはならぬと云ふこともない。寧ろ進むと云ふことも、退くと云ふこともないと云ふに歸着します。これでは萬有發達の標準點がない、畢竟、教とするには足りません。唯、萬有の神てあると云ふことのみを知りて、其の神たる萬有は、如何に發達すべきものなるかの標準點がないのであります。故に亦ほんの一端の教にして未だ全き神の教とするには足ません、これが汎神教萬有神教としての最も大なる欠陷であります。

第七節　無神論

無神論は世界列國とも、亦古代より發達しつゝある説であります。而して同一無神論中にも數派ありまするから一樣には論せられません。

第一段　怪疑説

これは人間が如何に研究して神其的を尋ねるも判然すること能はず、又如何に研究しても宇宙を吟味し盡し得らるゝものではない、判然たる定義は下すこと能はざるものである。唯、怪み疑ふと云ふことのみが現實にして。怪疑と云ふより外に道はない、唯、怪疑と云ふことのみが現に信すべき所はないと云ふ説であります。然らば怪疑

と云へば怪疑そのものも、亦怪疑であつて、全然怪疑なりと云ふ定義も下すことは出來ません、若し怪疑と云ふことの定義を下すものとすれば、之れ怪疑と云ふことを信じたる者にて、全然怪疑であると云ふことの判然したる說明となるのであります。左すれば怪疑と云ふものが實在しておることになります。然れば怪疑にして怪疑でなく、怪疑なりと云ふに決定したるものとなります。換言すれば「わからない」ものと云へば、わからないと云ふことに定りて、「わかッた」ものになります。之れ自身の腹を剌したる愚に歸すると共に、宇宙萬有は、人智を以ては全然知るべからざるものとせば、人間てふものは亦何等の發達をもなすことは出來ぬものとなります。人類の發達するは、宇宙萬有に對して、其の判然せざる所の的を研究吟味して實行したるの結果であります。若し人類が宇宙萬有の事は、始めよりして、判然せざるもの、思議す可からざるものとして、吟味研究をせないならば、今日の發達進步は見ることが出來ません。宇宙萬有は判然せざるもの〳〵如きも、段々研究吟味すれば次第〳〵に判明しつ〳〵あることは何よりの證據であります、古今東西の歷史は何よりも其の證明者ではありませんか。判然せざる中にも次第〳〵に判然しつ〳〵あるが故に、人類は愚安して生活進步しつ〳〵あるものであります。假令ば、日常の食物は何人も其滋養分を一々吟味して、而して後に食するものではありません、然れども古人の經驗より推して、食物は滋養分のあるものと承知して食しつ〳〵あるではありませんか。これ判然せざる中にも判然したるものと合點したるものであります。初めより疑惑するのみならば（專門家にあらざる限りは吟味すること能はざるが故に）人々は一つの食物の吟味にも一生を費して尙且判然すること能はず、遂に之れを食すること叶はずして餓死せねばなりますまい故に怪疑說は亦其の一端を說明し得たるものにして、全然、人類發達の敎導とはするに足らぬ次第であります。

第二段　自然說

これも古今列國に唱道せられて居る說でありまして、無神論中にては、勢力ある說であります。彼等は東西古今ともに、人爲と自然とを區別して、人爲は自然でない

人間は僞に走り、自然の性を損ふものである、早く自然に復れ、大古の無爲は自然であると主張するのであります。元來この自然說の由て來る所を吟味するに、天地萬有の現象を客觀して、雨の降るは自然である、風の吹くは自然である、月の照るは自然である、花の薫しきは自然である、水は自然に流れ、山は自然に高く、鳥は自然に囀ぎ、獸は自然に走るものなりと見て、其の雨や風や月雪花の行動が、何等の期待する所もなくして、自ら然るが如きの有樣を觀て、如何にも無心にして又無邪氣なるに恍々し、人間もかくこそありたけれと思ひ、翻つて人間の行動を觀まするれば、雨の如く風の如く花の如く月の如く無心にあらず、無邪氣にもあらざるが故に、慷慨歎息して早く無爲に化し、自然に歸れよと叫びたるものであります。然れどもこれは人間の行動と月雪や、花鳥や、風雨や、山水やの行動とを區別したるが爲めに起りたる誤りであります。若し其等の行動が自然なれば人間の行動も亦自然であります。人間の行動が人爲なれば、雨の行動は雨爲、風の行動は風爲、花の行動は花爲、月の行動は月爲、山水の行動は山爲、水爲であります。太古の無爲と云ふことは必ずしも何事もなさないと云ふ意味ではありません。唯ろの行動が單純てありしと云ふに過ぎないのであります。

んて、社會的組織がさまで整頓せざるが爲めに、其行動が單純であつた次第であります。後世に遜る程、人智經驗が發達進歩しましたから、社會の組織が整頓して其行動も亦復雜になつた次第であります。單純の行動が自然なりとすれば、復雜の行動も自然であります。均しくこれ人間の行動であります。僞が自然でないとは申されません。僞が自然なれば僞も亦自然であります。眞は自然なれども僞は自然でないとは申されません、眞が自然なれば僞も亦自然であります。均しくこれ人間の行動であるからであります。風吹き雨降り山高く水流るゝは、風爲、雨爲、山爲、水爲て、人間の行動は總て人爲てありまする。風雨山水の行動が自然なれば、人間の行動も亦自然であります、雨と云ひ、風と云ひ、山と云ひ、水と云ひ、決して一定したる行動のみはありません。風にも花を誘ひ出す春風あり、又花を滅却す所の寒風もあります。雨も油の如き春雨あるかとすれば、或は寒雨の霰となりて田畑を荒すか如き害をもなしま

す。水も細谷川を潺々と時的に流るゝかと思へば、滔々たる濁流に變して蛟龍をも逆捲が如きものともなります。是れ猶ほ人間の怒たり笑たり悲哀たり喜びたり、或は眞を言ひ僞を吐くと言ふ現象と、少しも異る所はありません。故に風爲雨爲花爲山爲水爲が自然なれば、人爲も亦ことごとく自然なりと言ふ次第であります。人爲と自然とを區別するは、主觀と客觀とを別々に區劃したる誤謬より來るもので、客觀の現象が自然なれば、主觀の現象も亦復自然で、同一自然であります。言葉を換へて申せば、客觀的現象が自然であつて、主觀的現象が自然でないとは斷じて言ふことが出來ません。而して客觀的現象は自然であつて尊ふべきものなれども、主觀的現象は不自然であつて賤む可きものであると言ふことも亦斷じて言はれません。不自然と云ふのも亦これ自然にして、自然と言ふ以上は主觀と客觀と總て自然でないものはありません。如此き說は、決して人類萬有の行動を律すべき道とするには足りません。若し自然を以て萬有の行動を律す可きものとすれば、其行動の境遇に準して均しく自然の發顯として尊むべき自然と賤む可き自然とがあるのであります。

其尊むべき自然と賤む可き自然との發顯るのも、均しくこれ自然の行爲であつて自然そう的が尊くもなり、又賤む可くもなるのであります。故に此自然說も未だ全き神の敎とするには足らない次第であります。況て自然とは何的か、不明瞭であります。

第三段　物質說

これは化學理學上の實驗より立論したる說にして、化學者は宇宙萬有の根本は、物質にして、うの物質は七十餘元素、若くば、元素の元素なる元元子の配合より成立したる者なれば、此元素の外、別に神と云ふものゝあるべき筈なしと云ふ說であります。而して理學者はその七十餘元素若しくは、元元子の配合する軌道、若しくは配合したる原因結果の消長的勢力を觀して、この勢力消長の外、別に神と云ふものはないと言ふ說であります。然るに物質と勢力とは同一のものにあらずして、物質は有形、勢力は無形なるものである、其有形なる物質と無形なる勢力とは、如何にして發顯り來るものなるかと云ふ關係に至りては、物質學者は物質の發動より勢力は生するものであると云ひ、理學者は寧ろ勢力の發動より物質は結晶するものである

と辨するに過ぎない。その無形なる勢力より、有形なる物質が、如何にして發顯り來るかと云ふに至つては說明することが出來ないと共に、有形なる物質より無形なる勢力が、如何にして發顯り來るものなりと云ふことをも說明することは出來ません。必竟ずれば、全然有形と無形との反對したるものが相生ずるとは如何なる理由に基くものなるかを明瞭に說明したものがないのであります。近世に至り人々をして科學者としては或る形より以下の範圍まで科學的に說明し得らるゝも、形より以上の事は說明し得るものでない、形而以上は宗教の範圍に屬するものなりと叫ばしむるに至りた者であります。故に物質と勢力との二つを以て宇宙萬有を解釋せんとするも、到底吾人々類をして滿足せしむることは能はざるものであります。今日では理學化學としての一學科としてはこれを認容し、又其の進步をも大に奬勵せざるべからざる者なれども、されば迄として、これを以て直に宇宙萬有を解釋し盡すものとせば、何人も承諾せざる所であります。唯その宇宙萬有としての一端の解釋に過ぎませんからであります。

第四段　萬有理性說

これは名稱と解釋こそ異なれ、或る意味に於て、理學者の勢力と云ふ說と殆ど同一に歸着するのであります。彼等は宇宙萬有を思惟歸納すれば、一定したる規則ある理性と云ふに歸着するを以て、宇宙萬有の根本は理性のみである、理性よりして、宇宙萬有は發顯來たるものなりと云ふ說であります。然るに、理と言ふは無形なるものにして宇宙萬有は有形なるものである、この無形なる理が、如何にして有形なる宇宙萬有とは發顯れ來たる者かと云へば、彼等は說明することが出來ません。これほんの一端を認め得たるものにして、これにては未だ全き宇宙萬有を解釋するには足りません（以上委細は大日本世界教宣明書參看）

要するに、これ等の無神論者は、各々宇宙萬有の一端を認め得たるものにして、全き解釋とはするに足りません。いまだ宇宙萬有を完全に解釋し得ざるものにして、安んぞ其の根本たる神と云ふことを承知することが出來ませうぞ。自然と言ひ勢力と言ひ理性と云ふも、必竟名目論たるに歸着するのであります。何となれば、彼等に其の的の

實質を示せと言へば、漠然として示すことは出來ないのである。自然と言へば、花を示しますか、花は物質である、自然その者ではありません。花の開くを以て勢力と云ひますか、開くは花の開くにして、勢力ではありません、花の散るを以て理性と申しますか、散るものは花にして理性ではないのであります、花を除きては、勢力も理性も見ることは出來ません、されば、勢力理性が花となるにはあらずして、花より勢力と理性とを發顯すものであると云ふも、彼等は何と答えまするか。必竟自然とか、勢力とか、理性とか云ふもの、實質はなくして、花の開く範圍、花の散る範圍を腦頭に觀念想像したる名目たるに歸着致しまする、これ等一端の名目理想を以て、宇宙萬有の全さを解釋し盡さんとするは、抑も過りたるものと思ひます、彼等が神と云ふことを認むること能はざるも、亦怪むに足りません、無神論の次第〳〵に衰へつゝあるのは世人が此等の說明には滿足すること能はぬからであります。

第八節　儒教

これは五倫五常の道德說は誠に穩健なるものにして、人類に適して動かすべからざるものであります、特に東洋列國は、その恩澤に沐浴しつゝあるのであります、然れとも宇宙萬有の解釋としては未た全さに達しては居らないものであります、ろれは儒教の一氣說一理說の如き、或は理中有氣說、氣中有理說の如きは、已に無神論中の各說に於て說明したるが如きに歸着いたします。氣のみを以て宇宙萬有を解釋し能はざるは、物質說を以て解釋し能はざると同樣であります。又、理のみを以て宇宙を解釋し能はざるは、猶、勢力及び自然等を以て解釋し能はざると同一であります。それで支那に於ても、氣より理を生したりと云ふ氣中有理說と、理より氣を生したりと云ふ理中有氣說とが生したる次第であります。然れども、有形なる氣と無形なる理とは、全然反對なるものにして、いかなれば其反對なる者が相一致しつゝあるかと云ふことは說明すること能はざると共に、有形なる氣より知何にして無形なる理の生するか、無形なる理より如何にして有形なる氣の生するやと云ふことは均しく說明すること能はざる次第であります。然れども、儒教では理氣の變化の測るべからざる所を尊稱して鬼神と申し、亦魂魄の天地に歸する所なぞを一種幽玄な

る大極造化の妙と信仰して居ります、故に全然無神論ではありません、唯その說明は漠然として共に全き敎とはするに足りません。大極とは何者ぞ、理なり氣なりと云ふより外、說明すること能はぬのであります。

第九節　佛敎

佛敎は三千年來發達し來りたる宗義にして其立義の幽玄高尙にして更に該博緻密なること恐らくは古今獨歩であります。泰西の哲學の如き、其立論は論理的に最も緻密なる觀察思惟を以て發達進歩しつゝありと雖も、之れを佛敎に比較對照せば、幼稚なる所が多々あるのであります。その一部分の緻密なることは、佛敎に卓越したる所なきにはあらざるも、全体の上より比較すれば、佛敎の方が範圍廣大て、餘程進んて居ると思はれます。（その委細は本論天照太神宮中に彼此比較論證してあります）

この幽玄高尙にして該博緻密なる佛敎に向て、第一に私の滿足すること能はざるものは、その如何に高尙幽玄にして、該博緻密なりとも、要するに三千年以前の立義にして、三千年以後の今日より觀すれば、尙且至らざる所多々あると思はれまする

と共に、其の欠陷は今日世界列國に唱道せられつゝある學說の欠陷と均しく、又同一の欠陷に陷り居ることを發見するからであります。

に渡りて立談の間に說き盡し得るものではありませんが、其概要を指摘しますれば佛敎の根本とする所は眞如、若しくは法性と云ふものであります。この眞如法性より山河大地十方淨土の發顯れたるものとする說であります。然れど、法性とは何ぞやと言へば、彼等は四大（地水火風　即ち元素）を指すより外に說明することは出來ません、即ち山河大地を假りて說明するより外に道はないのであります。若し四大たる山河大地を除きては、法性とは如何なるものぞと問はゞ、彼等は決して說明すること能はざるものであります。猶、支那の儒敎が氣たる山河大地を除きては、理を說明すること能はざるが如く、泰西の理學者哲學者が元素を除ては勢力、理性を說明することも能はざると一般であります。

法性とは無形にして、四大とは有形のものであります、彼等はこの四大と法性とは能依所依にして相依り相依て發顯れつゝありと說明する外に道はないのであります。

その法性とは何故に形なきものなるか、四大とは何故に形あるものであるかと云ふことは、説明して居らざると共に、無形なる法性より有形なる四大十界の如何にして發顯するものなるかと云ふことも説明すること能はざるものであります、假令ば眞言宗に於て法身佛が大日經を説きたるときは肉身であつたか、肉身でなかつたかと云へば、新義派の方では、法身で説かれたものにして、肉身で説かれたものではないと申しますし、古義派の方は肉身を顯はして説たものであると申して居ります。然らは古義派に向て、法身佛たる大日如來は如何にして肉身を發顯し得たるものぞと言へば、彼等はただ顯はしたるが故に顯はれたるなりと言ふのみにして、顯はしたるの理由を説明することは出來ないのであります。新義派に向て、法身とは何物ぞと言へば大虚空なりと言ふに過ぎない、大虚空とは何ぞやと言へば、彼等は四大なる大宇宙なりと言はねばならぬのであります。大宇宙とは物質的有形の成格あるものであります、然らば法身は有形的成格あるものと言はねばなりません。已に有形的成格あるものとせば其大成格は半面より觀察すれば分分の小成格より成立しつゝあるものであります。均しく成格なりとすれば大成格と小成格とは其の質に於ては異なる所はありません、同一肉身なり大肉身なり、唯、人間より觀して宇宙身人間身とこそ、その量に於て分つ迄てあります。然らば人間身は肉身なり、大日如來は大肉身であります、是を別に法身と云ふのは、何の理由ありて然る者であります か。彼等がこの宇宙萬有の根本を名稱するに、獨り無形なる意味を有する法と云ふのみを以て名けたるは、即ち法と云ふことのみに重きを置きたるものにして、法に重きを置きたるか故に大宇宙は法の發顯であると信ずるのであつて、さればろの無形なる法身より如何にして有形なる宇宙萬有は發顯するものぞと言へば、彼等は説明することが能はぬのであります。猶、理學者哲學者が理性より勢力より宇宙萬有は發顯すると言ふ迄にして、其發顯する所以の理由をば説明すること能はざると一般であります。

天台に於ける法華經の立義に向て、法を根本とするならば、無形なる法身より有形なる諸佛は如何にして發顯するかと云へば、均しく發顯すると云ふ迄にして、その

發顯する理由は說明すること能はざるものであります。その一念三千も、唯、我が一心一念に三千界發顯し來ると云ふも、是れ單に發顯し來ると觀するまでにして、心の起る根本と心と界との發顯する根本の說明が未だ不完全であります。況して其の止觀の極致は平等一圓の半面に墮落して居ります、止觀の極致は、佛敎としては非常に高尙幽玄なる處であります、哲學としても、亦此上に出ることは出來ますまい。而も全神敎より批判すれば、未だ以て足らざる所が尠からぬであります。要するに佛敎全體は法身佛を根本として宇宙十界を其法身佛よりの發顯とするのであります未だ法身其の的の何物たることは、法身そのもののみにて解釋することは、出來得ないものである、即ち四大の變化たる山河大地を假らざれば說明すること能はざるが故に、それでは法身より山河大地の四大が發顯するにはあらずして、四大たる山河大地より法身は發顯したるものなりと言ふも、彼等は決して辨解すること能はざるものであります。更に其法身と言ふ成格は、如何なるものぞと短刀直入すれば、彼等は直に法身其的を顯すことは出來ません、法身の異名たる眞如其の的の成格に向ても、眞如其的は如何なる成格ぞと肉薄せば、均しく眞如其的の成格をば示すこと能はずして、假令ば「水の如し」と言ふに過ぎないのであります。水とは比喩である、故に眞如其的を以て、水なりとは言はれません。然らば、眞如は水を假るの外に顯はすこと能はざるか、四大たる山河大地を假らざれば說明すること能はざるものか。さりとは眞如も亦水に依て顯はすことを得、四大に依てこそ顯はすことを得るものなるが故に、眞如法性より山河大地の發顯したるにあらずして、山河大地より眞如法性は發顯れたるものと云ふに歸着致します。而てみれば眞如法性とは必竟名目にして眞如法性ろのもの、實質たる成格はなきものに歸着します。猶、理性と云ひ、自然と云ひ、勢力と云ふと同一にして、或る物質の範圍を抽象觀念したる名稱たるに過ぎすして、未だ以て人生宇宙の根本義とするには足ません。

又佛敎は、或る方面より解釋すれば、唯心說にして、最も進步したる唯心說にして、萬法唯心、心外無別法と說くのであります、一切の諸法は心より生ずるものにて、心より外には法も物も認めません。然れやも、これ皆一方の法のみに偏したるが如く

又心の一方のみに偏したるものであります。恰も歐米の唯心說唯理說に偏したると同一であります。尤も佛敎に於て說く所の法と云ふ意味は。必ずしも法のみを抽象したるものではなく、法の內には心をも物をも具足したるものと見て居るのであります。又心と說くにも、單に心のみを抽象したるにはあらて、心の內に法をも物をも具足したるものと見て居るのであります。尙支那の理中に氣を有し、氣中に理を有し居ると云ふ說と同一義であります。勿論、西洋の唯心說唯物說と雖も、これ又心のみ物のみと云ふのではなくして、心の中に物を有し理を有し、物の中に心を有し理を有して居ると言ふのであります。たゞ、何故に形なき法は形ある物を有し、形なきの心は何故に形あるの物を有して居るか。又形なきの心より形なきの法と形あるの物とを有し居るかと云ふに至りては、皆何れも唯、有して居ると觀念する迄にして、其有して居る次第をば佛敎と均しく共に未だ以て說明することは出來ないのであります。佛敎に於ける萬法唯心なりとせば法と心と何等の差違あるか、法と言ひ心と言ふも同しきものにあらずや、心と云ふも其的なれば、法と云ふも亦

其的である。故に萬法唯心と云ふに反對して、萬心唯法と言ふも何等の異なる點がありますか。更に萬法唯物、萬心唯物と云ふも、亦同しきことであります。これはたゞ法と言ふを抽象して根本なりとするが故に、法に重きを置き、心と云ふを抽象して根本なりとするが故に、心に重きを置きたからであります。猶、支那に於ては理と云ふを抽象して根本なりとするが故に、理に重きを置き、氣を抽象して根本なりとするが故に、氣に重きを置きたると同一であります。歐米に於て心を抽象して根本としたるか故に物質に重きを置きしと同一の譯であります。されば佛敎に於ても、支那希臘歐米諸國の學說と一般、まだ法と心と物との分際調和と、及びその一致とが判然せざるものにして、曖昧至極に陷りて居ります。故に一切の經律論とも各々其の一方に偏して居ると共にこれを充分に調和し一致して、其の分際を明晰に說明し得ては居りません。華嚴の如きは、最もよく此の邊を調和一致したるものとして、佛者は閻魔の眼球か佛のお臍でも握りたるが如くよろこんで、居るものであります。其の事理重重、圓

融無碍の如き、その説明はいかにも巧妙でありまする。然れども、其の所謂事とは有形なるものにして、理とは無形なるものでありますが、其の事と云ふ有形なる物質と、理と云ふ無形なる法とは、單に相互に重重無碍に融會して居ると言ふことを説明したるのみにして、其の有形なる事としての色法と無形なる理と云ふ心法との發顯り來る次第と、有形なる色法的物質その的と、無形なる心法的理法其的との根本的説明は、未だ全きに達しては居りません。單に相互に圓融して居ることを説明するならば、何も華嚴の説明を待たずしても、萬有は本來圓融して居るのであります、四法十玄、重重ぞころか、百界百玄、千界千玄、萬界萬玄、億兆界億兆玄、無量界無量玄に重重重重重重重重重重に無碍圓融して居るのであります。華嚴の圓融法を待て圓融するものてはありません。無論華嚴はこの萬有の本來圓融して居る相即相入の實相を人類の解し得ざりしが故に、これを解釋して、人類を啓發教導せんとするものであります。然れども、圓融する事理其的の發し來る解釋が先づ以て定まらなくては、其の圓融の説明も未た以て全きものに達したるものとは申されません。必竟するに、華嚴は今日の言葉を以て申せば、本体と現象とを調和し、物質と心法とを調和せんとしたる説明に外ならぬのであります。其説明の巧妙なるに至りては、なか〳〵西歐の宗教哲學等の遠く及ぶ所てはありません。然れども、何と言ふても、三千年以前の時代思想であるが故に、今日より觀すれば、うの奥の踏着する所は、支那希臘歐米諸國の學説と同一徹に歸するのてありまするから、未だ全き解釋なりとはするに足りません。又彼等の一方が佛教の根本法輪は華嚴にありとして宇宙の根本は一法輪なりとして高くとまりますれども、同じ佛教内でも法華よりこれを觀する時は、反對してこれを容しません。華嚴に反對する法華經とていかに巧に一心三觀十界三千を説明するも、必竟するに唯一心に歸するのであります、唯二法身に歸するのであります、無形なる心法が有形なる山河大地等の十界を具足し居る理由は説明することなく、唯た具足して居ると觀し、本來無差別に成佛して居ると觀するまでであります、有形なる報身佛應身佛の無形なる法身佛より發顯れ來る次第は、均しく説明は出來て居りませんと共に、人法一体とするも、その有形な

る人と無形なる法との一体なる理由は説明してなく、唯發顯して居る、一体である
と信仰するばかりであります。華厳法華は勿論、八家各宗とも各自長短を爭ふて一
致して居りません、同一佛教内ですら此の如く一致することが出來ない、是れ未だ
以て宇宙萬有の解釋としては、其の全きに達せざること推して知る可きであります
要するに佛教の大小乘を統一すれば、唯一法身佛と云ふに歸着するのであります。
即ち大日如來も法身佛の發顯である、西方淨土の彌陀如來も、久遠實成の釋迦如來
も、一切十方の諸佛諸菩薩も悉く法身佛の發顯であります。然れば、大日如來も阿
彌陀如來も、印度出顯の釋尊も、均しく報身應身にして、
未だ宇宙萬有の根本とはするに足りません。ソコデ、大日如來も阿彌陀如來も釋尊も
十方淨土の諸佛諸菩薩も、悉く皆一法身佛に同化して仕舞はねばならぬ身分であり
ます。勿論、大日如來は、法身に化したるものであると眞言一派は信仰し、阿彌陀
如來は已に法身に化したるものなりと淨土眞宗の一派は信仰し、印度出世の釋尊も
久遠實成の釋迦如來となり、其の釋迦如來は法身に化して居るものなりと天台特に
日蓮宗等は信仰して居るのであります。乃至一切の諸佛諸菩薩は悉く法身に化して
居るものと信じて居るのであります。己に法身佛に同化して居るものとすれば、佛
教各宗各派は皆悉く唯一法身佛の淨土を說き、こゝに歸着するものと說明せねばな
りません。さすれば、何人の安身も法身佛に歸するを以て、彼等各宗各派が相互に
イヤ我宗の淨土が實教である、彼宗は權教である、實教でなくてはたすからぬ、極
教は方便であるなどと、內輪喧嘩をするの必要がないことゝ思はれます。その相互
に口論するのは、其の本尊が未だ何れも宇宙萬有の根本たる法身其的でなきが故に
此の如く相互に爭論するものと思ひます。然り、其本尊は何れも未だ法身佛其的で
はないからであります、法身佛其的より發顯したる報身佛應身佛であります、而し
て各宗各派とも、法身佛より如何にして報身佛應身佛が發顯したかと言へば、唯、
發顯したと信ずると言ふのみにして、其の發顯する理由に至りては、說明すること
が出來ませんのは、各宗各派とも一樣であります。ソコデ、佛教には十方に淨土あ
り、十方に諸佛諸菩薩あり、各々對等の位置を占有して、十方相互に、一佛は諸佛

を攝理して、其の長を發揮し、各宗相互に其の本尊佛を讃美嘆唱して、一方を上げ一方を下げつゝあるのであります、未だ各宗を統一したる根本佛と云ふものはありません、これ佛教の長所たるが如くにして又その短所であります。況んや其の各宗を通して根本佛とも云ふ可きは法身佛あるのみである、然れとも、この法身佛と云ふ解釋は、未だ以て不完全なるが故に其法身佛より發顯たりと云ふ十方の諸佛も、其の發顯たる原因を明かに説明することの能はざる次第であります。特にその法身と云ふ其の的は、前々より幾度か申し述べたるが如く、法と云ふ一方のみに落ちて未だ宇宙萬有の根本なりとするには足りません、物質と心性とを除きて、法身ろの的を出し見よと言へば、彼等は決して出すことは出來ません、猶、法と心とを除けて物質其の的を出し見よと云ふも、物質論者が出すこと能はざると同一である。法と物質とを除きて心性のみを出して説明し見よと云ふも、唯心論者が能はざるのと異ることはありません、是れいつれも均しく宇宙萬有の根本たる一角を示指し得たるものに過ぎません。宇宙萬有の根本としては未だ全き釋解ではありません。

更に佛教に於ては、各宗總てが悟りて佛となれば再び迷て出るとはないとして、その成佛することを不退轉の位と定めてあります。尤もこの娑婆世界等に衆生濟度の爲めには佛菩薩、聲聞緣覺等の應身となりて發顯れ來ることはありとするも、再び迷ふて煩惱身となり、此の娑婆世界等に退轉し來ることはないとしてあります。これは獨り佛教のみてはありません、一切の宗教宗義は古今東西とも皆一樣に佛となり神となりたる以上は再び迷ふて出て來ることはないものと定義して居ります。コヽが佛教を初め何れの宗教も第一の缺點であります。何となれば、何れの宗教、如何なる學説にしても、萬有は其の根本とする所の的より發顯したる現象なりとするは、皆一定してをります、已に根本より發顯する萬有は、無始無終に發顯するものなりとせば、佛教に於ても其の根本たる法身に同化したる十方諸佛諸菩薩は、又法身の衆生身や煩惱身と發顯れ來るが如く、如來も亦衆生身煩惱身としても退轉し來らねばならぬ次第てあります。若し根本たる法身よりは衆生の迷身煩惱身が顯はれ來るとするも、如來は再び迷身煩惱身として顯はれ來ることなしとせば、法身と

如來とは別物にして、兩立し、如來としては未だ以て其の根本たる法身には同化し得ざるものとなります。コレハ、佛敎者が如來と云ふことをあまりに有がたく思ふて大切に之を保存せんとするよりして、反て如來其的に欠陷を負るに至つたのであります。かくては悟たやうても、まだ〳〵悟が足らないものとなります、如來をかく迄淸淨無垢なるものとすれは、その反對に迷身煩惱身をば、最も汚穢至極のものとせねばなりません、又、如來は迷身煩惱身として退轉せざるものとせば、迷身煩惱身は如來身に向上することが出來ない譯けであります。迷身煩惱身が向上成佛することを得るとすれば、如來も又亦退轉するものとせねばなりません——元來如來身と言ひ、煩惱身と言ひ、二体あるものてはない——法身たる一体が如來身ともなり煩惱身ともなるもので、法身と悟れば如來身となり、法身に迷へば煩惱身となるに過ぎないのてあります、換言すれは、法身其的が煩惱とも顯はれ、如來とも顯はれるものにて、煩惱と如來とは本來一体てあります。もし煩惱と如來とが別物にして二体なりとせば、煩惱身は決して如來たることは出來ざると共に、如來身も亦煩惱身となるものてはありません。コレハ餘りに如來と云ふに重きを置き過ぐるより來りたる欠陷てあります。勿論、佛敎の內證至極の理より觀じまする時は、如來身も煩惱身も其の功に至つては經重はないのてあります、如來と云ふは煩惱身たる衆生に對するよりして申しまするのて煩惱とは如來に對するより申しまするのてあります。煩惱身たる衆生がなければ菩提身たる如來もないのてあります。又煩惱衆生がなければ如來は大慈大悲の願行をも發すること能はずして成道正覺の位に登るとも出來ません。又成道正覺の如來がなければ衆生の煩惱迷惑と云ふこともありません。ソコデ凡兒の見地から佛敎に解釋を與へまするとと佛と云ふを主として解釋しまするとは如來が佛であるのみならず、衆生も又佛でありまする、迷ふてゐる煩惱身其の儘が其の儘に成佛して居る如來てあります、又煩惱を主として言へば、獨り衆生が煩惱身たるのみならず、如來も亦一種の煩惱身てあります。必竟すれば、凡聖本來一体にして二体あるてはありません、法身が煩惱ともなれば如來ともなるのてありまず、即ち悟れば如來、迷へば凡夫、迷ふたるものは悟りて佛となり得るが如く、悟

りたる佛も亦迷ふて凡夫となるものであります。此が法身其の的の働きであつて、若し如來のみなれば、如來たることも能はざると共に、法身其の物の働きもなくなります。それ已に凡聖一体にして、如來と凡夫との區別がないとしますれば、如來にのみに重きを置きて、衆生凡夫のみを奈落底に墮すことは出來ない次第であります。たゞその法身の働きとして如來となり凡夫となるものとせば、均しくこれ同一の働きにして、如來に成たりとて喜ぶに足らざるが如く、凡夫たりとて又悲歎するにも足らぬ次第であります、凡夫と思へば却て如來て、如來と思へは却て凡夫であります。只其の法身發顯の働きとしては、差別的現象界の過程上として、凡夫となるものは懊慨して、必す佛とならねばならぬと覺悟し向上し進行すべきと共に、如來としては又活躍として迷身に退轉し來らねばなりません、此の如く無始無終に進退して各自分分の實相本能を發揮するが、根本たる法身佛としての働きなり狀態でありまする。諸行無常を說く佛教が獨り報身佛としての行相を常住不壞たらしめんとするは、前後矛盾したる敎義となりまする。この邊の道理は釋尊としては尻に御

承知がなくてはならぬ次第であります。然るを釋尊も世界列國古今の宗敎宗義學說と共に前後矛盾の說明を殘留したのは外でない、何と言ふても三千年以前の幼稚なる時代思想でありましたか故に、何れも未だ此の如きの矛盾欠陷を發見することが出來なかつた次第であります。これ獨り釋尊を咎めて非難すべからざると共に、其の末流末派たる各宗各派に向て責問するのは甚だ氣の毒なる思ひが致します。まだ〳〵佛敎の欠點と長所とに向てはアレ程大部のものでありまするが故に詳論せねばならぬことが多々益々多くありまして、勿論、大日本世界敎天照太神宮中には、委細に比較對照して之を辨彰してあります。コヽデハ二三の重なる點に向て、其の欠陷の一端〳〵を指摘して論破したのに過ぎません。（明治三十九年五月二十三日講義筆記）

第三章　將來の宗敎

以上順次に說明したるが如く人生宇宙の解釋としては、東西古今の宗義宗敎と云ふものは、何れも其の一端のみを說明し得たるものにて、未だ其の全きに違し得たものは

ないのであります。故に將來の宗教宗義は、獨り熊物教のみではいけません、獨り一神教のみでもいけません、又、獨り萬有神教でも、獨り自然神教でも、獨り理性教でも、獨り物質萬能主義でも獨り汎神教でもいけません、固より無神論では猶更らいけません、佛教のみでも足りません、猶太教、基督教、回回教のみでも足りません。波斯教、印度教儒教のみでも足らないのであります。將來の宗義宗教は、これ等の諸學諸教を總合統一して更に増補大成したる全神教でなくてはならぬのであります、全神教でなくては、宇宙萬有の根本本体大極大本體及び其の現象等の全きを知ることは出來ません。人生の由て來る所、宇宙萬有の由て來る所の全きを知らんとするには、全神教に歸せねばならぬ次第であります、無論、世界列國の大勢は、知らず識らず、人々自ら全神教に歸しつゝあることを人々自ら證明しつゝあるのであります。

在來の宗教では佛教、基督教、及、哲學的理性教の如きが、先づ以て一番進歩したるものとして居りすまる。其の佛教基督教理性教等の佛とし神とし理性とする所は、如何なる的なるか、これを全神教の全神とする所に比較して見ますれば、何れが一方に偏して居るか、何れが全きに達して居るかと云ふことが判然すると共に、總て之れ迄の宗義宗教學説の欠陷も判然し、全神教の諸教諸學説を總合統一し、更に増補大成したるものなりとの次第も判然することゝ思はれます。

第四章　全神教立義の前提（第一）

第十節　宇宙萬有の一体

宇宙萬有の何的たるを知らんとするには、之を大別すれば其れ〳〵主観よりするものと、客観よりするものと、主観客観を超絶するものとの三道に過ぎません。

宇宙萬有は同根一体であります、萬有は總て相互に關聯して、一物も別に取り除くことは出來ないのであります。小は一微塵より大は大宇宙に至る迄、悉く關聯し密着しつゝありまする、一として個々獨立に分離し居るものはありません、之れが一体なる證據であります、若しくは、多体であるものとすれば、其の体体

は相互に全然分離し獨立して居らねばなりません、然るに何人と雖も、宇宙萬有に向て其の一物を明確に取り除きて獨立ならしむることは出來ませんと共に、更に一物を加へることも出來ません、宇宙萬有は增すことも、減することも、乘ることも、除ることも出來ざるものであります、これ宇宙萬有の一体であると云ふことは證明さるゝも、二体である、三体である、更に多体であると云ふことは、證明することが出來ませんのであります。

然らばこの一体なるものを何と名稱すべきか。その名稱を下す前に當りて、一体其的の如何なる內容外容本体大本體を有して居るのであるかと云ふを吟味せざれば、名稱も下すことは出來ないのであります。

サヲ、この一体なるものを吟味するには唯今も申し述べたる如く、三つの道筋がありまする、その一は客觀よりするもの、その二は主觀よりするも、のその三は主客兩觀を超絕するものであります。

第十一節　客觀よりの吟味究明

之は化學者等が客觀上に向て天地山河草木禽獸蟲魚等萬有の形態を分析するさとは、元素を求め得るのみにして、元素より外は、又其の形態を認めぬのであります、總ての形態は其の元素より得たるものなるか故に、萬有は元素より成立したるもの也と致しましたもので。然れども元素としては、尙種々樣々の元素が存して——七十餘元素の多種が存して居ります、故に、今日の科學者は更に究明して元素の元素、所謂元々子なるものを研究し、萬有は元素の元素、元々子より成立したるもの也と立論するが如き、或は古代印度の極微論者の如き、總て客觀上より人生宇宙を解釋せんとする者であり次。然るに元素は勿論、元々子迄究め得たりとするも、例へば「ラヂム」の如きを究め得たりとするも、其の元々子のみにては決して宇宙萬有の本体大本體を解釋することの出來るものではありません、故に其の元々子なるものに向て、更に精力の存することあるを究めつゝ、靜に之を觀して元素元々子なるもの、根本は精力であると信するに

至つたのであります。而してこの精力と云ふことは、客觀するが故に精力にして、それを主觀すれば意思となり心性となります。

第十二節　主觀よりの吟味研究

吾人人類の活動するものは、心性なり意思なり、故に山河草木禽獸蟲魚等の發動は均しく是れ心性なり意思生活なりとするのであります、古今東西宗義哲學としての唯心論者がうれなのであります。即ち主觀より宇宙萬有を吟味したものであります。

第十三節　主觀客觀超絶よりの吟味研究

今夫れ科學者が宇宙萬有の根本を以て元素元々子若しくは精力なりとするも、單に客觀上の吟味のみを以て、宇宙萬有の根本本体を元素元々子若しくは精力なりとするのではなくして、之を主觀に應用すれば、吾人人類の肉体と見る者も元素なり元々子なり、意思と感するのも精力なり。然れば主觀客觀とも、均しく之れ原子なり精力なりとして主客兩觀を融會超絶し、宇宙唯一絶對の元子なり精力なりとしたるものであります。亦心理學者哲學者宗教者が意思なり心性なりとする者は、單に主觀上の吟味を以て宇宙萬有の根本本体を意思なり心性なりとするのではなく、之を客觀に應用して、禽獸の動くも、意思の發動である、草木の消長、山河の高低も意思の發動である然れば主觀客觀とも、均しく之れ意思生活なりとして、主客兩觀を融會超絶し、宇宙は唯一絶對の意思なりとしたのであります。この點に於ては何れも主觀客觀を融會超絶したる唯一絶對上の解釋であります。

第一段　兩觀超絶後の大客觀的落在

然かれども、科學者が主觀上の人類自己をも客觀と均しく元子なり精力なりとするは、いかに主客兩觀を融會超絶しても、猶且客觀に重きを置きての解釋であります、之を兩觀超絶後の大客觀的主張の解釋とは申します。又心理學者哲學者が主觀の意思心性を客觀に應用して萬有の精力を意思なり心性なりとするのは、いかに主客兩觀を融會超絶しての見地なりとするも、猶且均しく客觀上に落在したる解釋

てありまする之を兩觀超絶後の大客觀的落在の解釋とは申します。何となれば、主客兩觀を融會超絶して意思なりとするも、依然主觀的意思を推し擴めて、客觀的萬有に落在せしめつゝあるからであります。主觀の意思が客觀に向て終結し決定し居るからであります、これ等は何れも客觀に於て其解釋の終結決定したるもので、唯その唯物的科學者哲學者としては其の初めに客觀より起り、客觀上の原子精力を主觀に應用して、主觀の心肉を原子精力なりとし、茲に主客兩觀を融會超絶して、更に宇宙は原子なり精力なりとの宇宙的大客觀的主張に復歸したる者と。唯心的哲學者宗教者としては、其初めに主觀より起り、主觀上の心性意思を客觀の萬有に應用して、其の物体運動なる原子精力を心性なり意思なりとし、茲に主客兩觀を融會超絶して、更に宇宙は心性なり意思なりとの宇宙的大客觀に落在して兩觀共に意思なりと云ふとの解釋を終結決定したる者との差あるのみてあります。換言すれば、初めに客觀より起りたる見地と、主觀より起りたる見地との差あるばかりて、その各自主張の見地を決定することは、均しく大客觀的宇宙に歸して終結したるものてあります。故に假令主觀より起りたるものも客觀に應用して更に主客兩觀を融會超絶し、最後に亦主觀の見地を大客觀的宇宙に落在して解決したるを以て、均しく大客觀的落在の解釋とはなります。

佛教者が、客觀上の一切諸相を除て、其の差別を取り去り、平等無差別なりと解釋したのも、主觀を客觀に投じ、主客兩觀を融會超絶して後に、更に宇宙的大客觀的解釋に落在したるものてありまする、これ等は其の方法に種々なる階級はありますれども均しく主觀客觀を融會超絶して、更に萬有の一体なるとを宇宙的大客觀に終結して、哲學者科學者宗教者が是れ元々子なり精力なり是れ心性なり意思なり平等なりと解釋したるものてあります。佛教はこの主客兩觀を融會超絶して後の宇宙的大客觀に平等觀して、眞如なり法性なり唯心なりと解釋し、儒者は大極なり、氣なり、理なりと解釋し、哲學者は理性なり意思なり自然なり本体なりと解釋し。化學者理學者は元素なり元々子なり引力なり重力なり精力なりと解釋したるものてあります。何れも兩觀超絶後の宇宙的大客觀のみに於て決定を與へましたるが故に、俱

に均しく成格なるものがなきものとなりました。元素元々子としても平等であります、精力としても理性としても平等であります、心性意思としても平等であります眞如法性としても平等であります、大極としても自然としても平等であります、何れも皆平等としての成格より外、又何等の成格をも發見することは能はざるが故に、ソコデ、古今東西とも何れも均しく宇宙萬有の本体は平等なりと解釋したるものであります。而して此兩觀超絶後の宇宙的大客觀地を更に復、主觀に應用して人類自己も均しく元素なり元々子なり氣なり理性なり、眞如なり、法性なり大極なり大素なりと解釋し、主客兩觀ともに、再び融會超絶して、宇宙萬有は元素なり、元々子なり、氣なり、理なり、精力なり、意思なり、心性なり、法性なり理性なり、眞如なり、大極なりと解釋し、而して主客兩觀共に平等なりと解決したるものであります。故にこの平等より外には、何者もないといたしました、平等としとの成格より外、又何等の成格をも發見することは能はざるに至りた次第であります。さすれば、其の本体としての名稱こそ異なれ、その本体なるものは平等なりとする點に於ては、何れも一樣であると共に、この平等なる本体より宇宙萬有は發顯したるものとすることは何れの科學者、哲學者若しくは一派の宗教者も、多くば是れ同一樣の見解であります、コレが古今東西の立學者立教者としての過である一大欠陷であります。

第二段　兩觀超絶後の大主觀的落在

猶太教基督教萬有神教等の如きは主觀のみに重きを置きて、人格と云ふことばかりを深く信じ、主觀客觀を超絶して後、更にこの大主觀的人格より直覺して神なるものを主張し、神なるものより宇宙萬有は發顯したるものなりとして、客觀的宇宙萬有の外に全智全能の神なるものありて、其の宇宙萬有を造りたるものなりと主張し宇宙萬有と神とを全々別物と見て、神を主とし宇宙萬有を從とし、神を貴び萬有を賤しみたるものであります。而して又客觀的平等の境あることを解せざるに至つた次第であります。而して萬有神教の如きは宇宙を以て直に神其的として、亦殆と萬有を認めざる極端論を出すに至りました。是れ大客觀的平等のみを悟りて亦差別の

相を認めざる偏端に反比例したるものであります、是れいつれもその誤りの最も大なるものにして、其の説に最大なる欠陥を生したる次第であります。

第十四節　各自一端の解釋

客觀より主觀に應用して更に超絶的大客觀に復蹄したる科學者も、主觀より客觀に應用して更に超絶的大客觀に落在したる哲學者宗教者も、主觀より主觀に逆上偏執したる猶太教基督教者も、萬有神教の一派も各々其の一端の見地に陷りたるものにして未た全き本体大本體に達せざるものであります。故に平等なる本体より、如何にして差別ある現象の發顯し、其の現象には何故有形無形の等分等ありやを質問すれば、いつれもまだ明瞭に解答すること能はざると共に、神が宇宙萬有を造りたりと云ふ其の造りたることも論理的には説明すること能はざる次第であります。更に宇宙直に神として其神は何故に此の如き萬有を發顯しつゝあるかをも明瞭に説明することが出來ぬのであります。

第十五節　本体現象の誤解

元來平等的本体より差別的現象が生じたりと云ふことが已に既に過りたるものであります、特に神のみが獨りまし〳〵て、而して後に七夜の間に宇宙萬有を造りたるなりなど云ふが如きは、最も奇怪千萬なる昔話であります。今私が平等的本体より差別的現象が生したりと云ふことを誤りなりと申せば、人々の多くは三千年來其の腦頭に深く浸み込みたる説に反對なるが故に、奇異の感想を發するならんが、私は茲に三千來年の誤謬を人類に向て訂正するの責任あるものと信じまするが故に、全神教趣大旨本世界教を宣明主張致しまする所以であります。

第十六節　主觀的差別客觀的平等の一体

元來世の所謂本体現象と云ふことが、全神教より解釋すれば已に間違てゐるのであります。所謂本体とは本体其の的にあらずして、現象と云ふも現象其の的てはないので

あります。故に先づこの本体現象と云ふ其的の實質を吟味究明して説明せねばなりません。

私はこの天地萬有の關聯密着しつゝ分離すべからざる所の一体を究明しまするに。宇宙的大客觀すれば平等でありまする（たとひ主觀より出でたる者にても、其の主觀の意思を客觀に應用し主客兩觀を融會超絶して後に更に宇宙的大客觀に落在すれば、又均しく超絶後の大客觀に歸するものなるを以て、同しく客觀上の解釋と致します）天地萬有は兩觀を一致超絶して後も宇宙的に大客觀すれば均しく平等に歸する者でありまする――この平等に歸したる境を――人々は本体なりと信して居るのであります而して其の本体なる平等より天地萬有なる差別の現象が發顯したるものと信して居るのであります。然れども、この一体なるものは超絶的大客觀上の平等のみにて止まる者ではありません、超絶的に大主觀すれば亦直に一大成格になり居るものであります然れども、自己のみ超絶的に大主觀する者ではありません、其大成格は分分に主觀しつゝあるものであります、て、其處に分分の差別が發顯して居ります、故に其分分の主

觀より差別を爲しつゝあるが故に、分分各自に主觀すれば差別であると申します。亦自己のみ超絶的に大客觀するでなく、其大平等は分分客觀しつゝあるので在矣、其分分の客觀は均しく平等原料を觀して居矣、主觀しつゝある自己も他よりは客觀されて平等視しされ原料視しされて居るので、故に分分に客觀すれば平等原料であると申します、故に天地萬有は各自相互に超絶的に客觀すれば、平等にして、相對的に客觀すれば原料にして、この平等を超絶的に主觀すれば、其の平等が直に一大成格にして相對的に主觀すれば其原料が個個の差別たる者でありま。す故に平等なる的より差別が發顯したるに非して、平等其の的が直に差別でこそありまする。唯、超絶的に大客觀するが故に平等にして相對的に客觀するが故に原料にして、超絶的に主觀すれば直に大成格となり、相對的に主觀すれば直に差別となるであります。且夫れ觀地と觀人とは平等一致たりつゝある中にも、差別を生して居りまする、主觀客觀一致超絶して平等なりと觀念する意識的人があればこそ、平等なりと觀するのであります、若し觀ずる所の意識的人がないなれば、平等と云ふともないのであります。況して平等とは活体で

ありて死物ではない、故に分分に活動しつゝあるのであります、分分の活動なくば平等其的も實在することは出來ないのであります。故に大客觀上の平等と云ふ其的が、早や分分差別の活動を爲しつゝあるものである、又大主觀上の大成格と云ふものも、唯一大成格のみとすれば、平等であります。大成格としては、唯一にして之に對するものがないからであります。然れとも本來主觀のみするものではなきと共に、客觀のみするものではありません、主觀兩觀を超絶して大主觀のみせらるゝものでもなく、大客觀のみせらるゝものでもありません。主客一致したる平等なりと觀するは、已に平等なりと觀ずる大主觀者があるからであります。主客一致したる大成格なりと觀ずるは、已に大成格なりと觀する前後左右に大客觀がありて反照するからであります。大客觀なくんば大主觀することも出來ません、大主觀なくんば大客觀することも出來ません、大主觀のみとすれば大主觀其的さへ解すること能はさるに至ると共に、大客觀のみとすれば、大客觀其的も亦解すべからさるものとなります。而も本來が大主觀のみのものでもなく、大客觀のみでもありません、大主觀すると共に大客觀し、大客觀すると共に大主觀しつゝあるものであります。それ已に超絶的に大主觀すると共に大客觀し、大客觀すると共に、大主觀するものなるが故に、双對的に於ても主觀すると共に客觀し、客觀すると共に主觀しつゝあるのであります。決して主觀のみし客觀のみせらるゝものではありません。

さて亦茲に云ふ大成格とは意思的具体にして、人格的の如きものを意味するのであります。平等とは無意識的原料にして、（平等其的は勿論意識を有するとするも、他より客觀する時は意識なきが如きものとなります）例へば空氣の如き、水の如き、火の如き風の如きものとなります。故にその相對的に於ける客觀上の者は主觀する其的よりは、自己の需用に給養する滋養的原料と見て、亦その客觀的差別をも認めさるに至るものであります、例へは人類としての主觀地より云へば、宇宙萬有を客觀しては、その動植鑛物山河大地等の別なく、悉く打丸して、自家生活の需用に給養する同一原料とこそ見て居るのであります。人類のみとして云ふも、相互に主觀し客觀して、自家生活の需用に他をば供給せんとこそしつゝあるのであります。獨り人類のみならず、宇

宙萬有は、相互に主觀し客觀せられて、自家に需用供給すると共に、亦他に需用供給せられつゝあるものであります。

故に超絶的にも双對的にも、大主觀のみのものなく、大客觀のみのものなく、客觀のみのものなく、大主觀すると共に大客觀し、大客觀すると共に大主觀し、主觀すると共に客觀し、客觀すると共に主觀しつゝあるものであります。

さすれば、原料より成格が發し、平等より差別が生したるものではありません、相互に成格が原料となり、原料が成格となり、平等となり差別となりつゝあるのであります。夫れ已に平等原料より成格差別が發顯したるものでないとすれば、平等原料を以て直に成格差別を生するの本体なりとは云はれない次第であります。それは其の一体なるものを超絶的に大客觀しては平等にして相對的に客觀しては原料にして、超絶的に大主觀すれば大成格にして、相對的に主觀すれば直に差別なるものとせば、平等たる實の的と差別たるその的との二物あるにあらず、本來一体なるものであります。本來一体也者が何故に平等たり差別たりするかと云ふに其的が其的を主觀大主觀すれば大成格にして差別にして客觀大客觀すれば平等たり原料たるに過ざる者て在矣此一体也者は平等のみにも非ず又差別のみにも非ず常に相互に主觀客觀する分際に於て相互に平等原料なると共に差別成格たり、差別成格たると共に平等原料たる者て有矣。

第十七節　平等差別の生する所所と相互の主觀客觀

そは何故ぞと申すに此二体也者は主觀大主觀すると共に客觀大客觀し客觀大客觀すると共に主觀大主觀しつゝある者て在矣。そて主觀しては平等たり原料たり。客觀せられては平等たり原料たり。客觀せられては成格たり差別たりつゝある者てあります。コレが即ち私の所謂本体なるものであります

第十八節　本体と英靈

この本体を稱して「英靈」と申します、この英靈は平等のみてはなきと共に差別のみでもありません。常に主觀しては成格たり差別たりつゝあると共に客觀しては平等た

り原料たりつゝ在のてあり矣、客觀らせれて平等たり原料たりつゝあると共に主觀しては成格たり差別たりつゝあるものてあります。本体とは平等のみの者てはありません。天地萬有はこの英靈を以て本体といたして居ります、この本体たる英靈の相互に主觀客觀する活働よりして、天地萬有は發顯しつゝあるものてあります。

第十九節　萬有相互の主觀客觀と現象及時間空間

本体たる英靈が主觀客觀して成格たり差別たり平等たり原料たりつゝありと云ふことは如何なる現象なるかと云ふに、假令ば人は主觀すれば各々自己を認めて、自巳其的の成格を現はさんとし、客觀すれば他を認めて總て自己の爲めに供するの原料たらしめんとしつゝあるのてあります。言葉を換て申せば自己其的が他より客觀せらるゝときは、自己としての成格は他の原料として供給せられつゝあると共に、自己を主觀しては他を客觀して自己成格の原料たらしめんとしつゝある者て在矣。更に人類が主觀して自己を認むると共に、萬有を客觀しては、動植鑛物山河大地等と見、空氣と見て

均しく自巳成格の生活に需用供給するの原料たらしめんとしつゝあるものてあります、其空氣の中にも人類の生活に適當なる空氣は善良なるものとして之を呼吸し、其の生活に妨害あるものは不良なる空氣として、之を排斥して居ります。

人類は主觀して自己を認め、客觀して他を認めつゝあれども、主觀客觀することは、決して獨り人類のみの專有てはありません、萬有悉く主觀客觀を有するものてあります。故に人類より客觀すればこそ、空氣も空氣として人類の生活に供給せられつゝあれども、空氣其的が主觀すれば、空氣は空氣相應なる成格を認めて自巳を主張しつゝあるものてあります。空氣は一種の生物て均しく人類と同樣なる活物てある、故に空氣其的が主觀して自己成格を認むる見地より申しますれば、彼等は人類を客觀して亦空氣の如く認めて居るのてありまする、コレ恰も人類が一種の成格ある生物を客觀して空氣と眺め居ると同一てありまする、例へば彼の「ペスト」菌の如きは人間を客觀して、自己生活の原料に供しつゝあるのは、恰も人類が空氣其的を客觀して自巳生活

の原料に供しつゝあると少しも異る點はありません、故に彼等微菌は人間の肉体を浸食することは、何等の妨げもなく、千人萬人億人直に食ひ盡して仕舞ひまする。殆と人類が空氣を呼吸しつゝ空氣の中を何等の障害もなく歩行すると異るところはありません、此の如く小は一微塵より大は大宇宙に至る迄、萬有の總ては主觀しつゝ客觀し、客觀しつゝ主觀し居るのであります。自己を主觀すると共に他よりは客觀せられ他より客觀せらるゝと共に自己をば主觀しつゝあるものであります。時間空時は此の相互に主觀客觀する分際より發顯する者であります。佛敎の永劫虛空と云ふ解釋も其根底を誤りて居ります、哲學者の時間空間と云ふ解釋も其根底を誤りて居ります、獨り人類のみ主觀客觀の兩觀を有するものではありません、然るに古今東西の哲學者宗敎者は自己主觀上の見地のみを以て宇宙萬有を解釋し、又は自己客觀上の見地のみを以て宇宙萬有を解釋し、且つ其の主觀客觀を超絶したりと云ふ見地も、大主觀に偏せされば、大客觀に落在して居ります。更に其の主觀客觀なるものは、獨り人類のみの主觀客觀にして、その人類のみの主觀客觀を以て宇宙萬有を解釋せんとするのであります、これその誤謬の最も甚しきものではありませんか。

第二十節　一方面解釋の結果と人生に於ける弊害

夫れ一体なる英靈は、超絶的にも相對的にも、主觀すると共に客觀し、客觀すると共に主觀しつゝある者なるが故に、單に人類的客觀より解釋し、若くは主觀より大客觀に落在したる見地等にては、宇宙萬有の本体現象を解釋し得らるべきものにあらざると共に人類的主觀のみを以て解釋し、若しくは主觀を以て客觀を滅却したる大主觀のみに落在したる見地のみ等にては、又均しく其の本体現象を解釋し得べきものではありません。若し客觀のみより解釋し、若くは主觀より大客觀に落在したる見地等より其の本体及び現象を解釋し見よ、如何なる結果を生するものなるか、洵に融通のきかざる片輪者となるのであります。

假令は宇宙萬有を物質のみとして、其の物質の元素元々子たるものとしての平等地に落在し見られよ、この大宇宙は一圓平等の元素元々子にして、其の行動は全然發顯し

能はざるに至るてあらう、平等なるものは不平均なるが故に、空間なるが故に進むこともなく退くこともなく、全然行動することは出來ざる者であります、此の如き進退なき行動なきの一体は、抑も何事もなすこと能はぬもので、天人萬有は決して發顯活躍することは出來ません。よし假りに此の如きの境のみがありとするも、吾人はこの進退なき行動なき平等なる元素元々子に歸着して何等の活動をもなすこと能はざると共に亦何等の慰安をも得ること能はざるものであります。よしその行動なく、慰安なしとするも、この境の何故に實在するがを解すること能はざると共に、その實在することすら叶ふまじと思はれます、活動進退なきものは生命なきものであります。此の如き平等のみの境を以て天人萬有の本体なりとせば、誠に厭ふ可きの本体であります、吾人人類は如是本体に歸結するを以て滿足することは斷して出來ません。又吾人人類は如是の本体より發顯し來りたる者也とは、決して信することが出來ません、況んや進むこともなき退くこともなき何等の行動をもなし能はざる本体は、天人萬有を發顯し能はざること明瞭なる次第てありますす、故に私は如是の見地より解釋したる本体は決して天地萬有の本体なりと信することは出來ざる所以てあります。其他精力なり理性なり法性なり眞如なり大極なりの平等的見地の解釋は以上說明したると同一の論破に歸着するを以て天人萬有の本体とするに足らざるものなりと斷言する次第てあります。特に科學者が人生を實利一方に導きて、最高道德律を否定し、哲學者宗教者が人生を輕じて器械となし、夢幻迷妄と爲すか如きは、全く此の大客觀より平等地のみを誤解したるより來る弊害であります。

第廿一節　無我利他主義の誤解

更にこの超絶的大客觀の見地のみを以て、吾人人類の行動的標準としまするか、吾人は客觀のみを認めて主觀せず、唯その客觀たる他人の爲めに、吾人の全身を貢獻する他愛主義者となりまする。吾人が吾人の全身を他に貢獻するを以て、吾人人類の道德律として極上なるものとせば、吾人の他人に貢獻すると共に、他人は第三の他人の爲めに貢獻せざるべからず、第三の他人は又第四の他人に貢獻せざるべからず、此の如

く轉々他人の爲めに貢献し、而して後の終極は如何、眞如法性其的は何物の爲めに盡すことが出來ますか、元素元々子其的は何物の爲めに其身を盡しまするか、神其的は何者の爲に其身を盡しまするか、此に於ては平等一圓なる眞如より外、平等一圓なる元々子より外、又何物もないのであります。若し夫れ平等一圓の眞如法性若しくは元々子若しくば神は萬有の爲めに貢献するものなりと言はゝ、これ一圓平等なる眞如法性の外に原子の外に、神の外に、別に萬有なるものを認めたるものとなりまする、若し萬有なるものを別に認むるにあらずして一圓平等なる元子、若しくば眞如其の的より、若しくば神其的より、夫萬有を發顯するものなりとせば、これ萬有の爲めに貢献するにはあらずして、是れ自己其的の成格を顯はさんが爲めに——自己に盡すものにして、他の爲めに盡すと云ふものではありません。それ萬有の本体たる元子、若しくは、眞如法性若しくは神其的は眞如法性其的たる、元子其的たる、神其的たる自己を顯はさんが爲めに自己に盡す者にして、而もそれより發顯したる萬有、萬有の隨一たる人類、その人類の道徳律としては、他の爲めにのみ貢献せねならぬと云ふことは、前後矛盾して居ります、此の如きの道徳律なるものは未だ以てその淵源する所の根據なきものと云はねばなりません、若し他の爲めにのみ盡すものなりと云ふを以て道徳律の極上なるものとせば、人類は初めより生生せざるに如ざる次第であります。萬有も他の爲めにのみ盡すと云ふを以て——盡さざる可からざる成格を以て——發顯するものとせば寧ろ初めより生生せざるに如ざる次第であります、生生すると共に直に他に貢献し盡して自滅せざる可からざるものとせば、初めよりして生生するの必要はなきに着蹄すればであります。

これは全く客觀上にのみ着目して主觀を客觀に同化渾成したるより來る弊害であります。共に、主觀に客觀を同化して更に大客觀に落在したるより來る弊害であります。均しく客觀的平等に陷りたる欠陷であります。佛教の無我の如きは、最も其弊に陷りて、宇宙萬有を誤り、人生を殘賊して居ります。物質論者が客觀上の物質と勢力とを見て、主觀上の肉身心性も、亦均しく物質なり勢力なりとの平等地に落ちたるが如き

更に最も宇宙萬有を誤り、人生を殘賊して居るものであります。心理學者哲學者宗教者が主觀上の心性を客觀上の理性に同化渾成して更に其の大客觀的平等の心性理性地に落在したるが如き、大小の差こそあれ、其弊を同ふして居るものであります。是れ全神教の起り來る次第であります。

第廿二節　自我利己主義の誤解

大客觀的平等を以て宇宙萬有の本体現象を解釋し盡すことは能はざるが如く、又大主觀的成格のみを以ても、宇宙萬有の本体現象を解釋し盡すことは出來得ないのであります。若し超絶的大主觀上の見地のみを以て解釋するものとせば、如何なる結果を來すでありませう。大主觀上の見地のみを以て解釋を與へますれば、亦た均しく進むこともなく退くこともなく活働することもなき、洵に融通のきかざる窮屈なるものとなるのであります。如何なれば、その相對上に於ても、萬有均しく主觀して自己のみを認むる者なりとせば、宇宙は宛然、蛆虫の結集したるが如きものとなりまする

自己の外に自己あり、自己の内に自己あり、自己の左右に自己あり、自己の上下に自己あり、前後左右、上下内外、四方八表とも萬有たる自己の集合にして、蛆蟲の結集し居るよりも、更に窮屈なるものにして、寸動することだも能はず、亦何等の活働すら爲す能はざるに至りまする。更にその超絶的に於ても、宇宙を以て直に神なり佛なりとせば其の神のみその佛のみは、又何等の活働か爲し得られまするぞ、神としての み佛としてのみなれば、何等の威嚴も何等の慈愛も發顯することは出來ません。此の如き活働なき窮屈なる境を以て本体なりとせば、その本体は、何等の威嚴もなく何等の慈愛もなきものであります。神のみ佛のみなれば、進むことも退くことも叶はず一歩も活働することが能はぬからであります矣。此の如き主觀大主觀のみの見地は、決して本体とはするに足らざると共に、此の如き主觀大主觀上のみの見地を以て本体なりとし、其の本体を神なり佛なりとせば、その神ろの佛は主觀のみするが故に、他を發顯し、他を能造することも能はざるに歸着いたしまする、萬有神教、自然神教、汎神教及び、佛教の大日如來說等が、此の點に於て同一の欠陷があるのであります。獨

り萬有神教眞言大日說のみならず、猶太教基督教回回教等の唯一神說も、又同一の窮屈に陷ります。何となれば、神は主觀するのみとせば、自己其の的を認むるより外他を認むること能はざるが故に、神のみにして四圍なるさか故に其窮屈さはいかがありませう、是れ均しく天地萬有を能造することは能はざるに歸着いたします。是の如き主觀大主觀的見地のみを以て、その相對上に於ける吾人人類の道德的標準といたしますれば、其の社會的生活の組織に向て、如何なる結果を生ずるのでありませう、人々悉く主觀して自我實顯のみを認め、自己を實顯するが爲めには、全然他人を認めず、天地萬有の悉くを食ひ盡さざれば滿足すること能はざるに諦着いたします。自我實顯の利己主義を以て、人類行動の標準なりとせば、人々は相互に爭鬪齒食し、弱肉强食し、人生は如何なる悲慘の境に陷るでありませう、又其の結果としては、天地萬有を食ひ盡したる後は唯一人となるのであります、天地萬有を食ひ盡したる後は唯一人となるのであります、天地萬有を食ひ盡して、唯一人とならざれば、自己のみを實顯し得たるものとは言はれない、此の如く、天地萬有を食ひ盡したる後の唯一人となりては、又何物を食はんとするでありませう、其の唯一人は、自己その的を食するより外、別に道なきに歸着いたします。若し自己を食ひ盡しては、自己を實顯すること能はざるが故に、自己をば食ひ盡すこと能はずとせば、最早何物も食すること能はざるに至ります、何物をも食すること能はざる自己一人としては、如何にして自己の生命を相續することを得ませうぞ。抑も天地萬有を食ひ盡したる後の自己は、亦何的を食はずとも、其の生命には影響なしとしますることか然らは、其の生命ある自己唯一人は、更に何事をなさんとしますか、獨り角力の外何等の行動さへなすこと能はざると共に、其の實は自己としても存在すること能はざるの窮地に落在するてあります、自己のみなれば、自己と云ふことすら認むること能はぬものである、さりとは如何にして自己を實顯しますぞ。主觀大主觀的見地のみにては宇宙萬有の本體とするに足らざると共に、人類行動の標準點とするにも足らざること明瞭でありませう、これ全神教の發顯れ來る所以であります。

第廿三節　古今宗教學說誤解の由來

宇宙萬有の解釋は、主觀のみにては不可なり、客觀のみにても不可なり、須らく主客兩觀を用ゐねばならぬと云はれたる「ショペンハワエル」氏の如きも、其の主觀客觀と云ふことは、人類の主觀客觀のみに限りたるものにて、未だ萬有總ての主觀客觀あることに心附てはれられないのてあります。佛教の如き、其の立論は主觀客觀の兩觀及びその超絶的大觀を用ゐたれども、均しく人類としての主觀客觀及び大觀に重きを置きて、天地萬有を解釋いたしまするが故に、其の大乘教理の極上とも云ふべき天台の止觀說の如き、兩觀超絶後の大客觀的平等のみに落在して、更にこれを主觀に應用融會し、其の大客觀的平等のみを以て、極上の正覺なりと誤信して居ります。或は眞言の大日如來の如き、亦主觀より客觀に應用融會して、更に超絶的大主觀に落在し、大日如來の大成格的法身を天地萬有の本体なりと餌信するのてあります。法華宗の南無妙法蓮華經の寶塔の如きも、主觀より客觀に之を應用融會して更に大客觀

に落在し、奇々怪々なる本体を顯出して居ります。又、猶太教基督教回回教の如き、同じく超絶的大主觀のみに落在したる立論なるが故に、尤に窮屈なる欠陷を生したる者て在矣「プラトーン」「アリストテレースー」の師弟が現象は本体の中にあり、イヤ本体は現象の中にこそあれとの見解を異にしたるも、亦此主觀客觀相互兩觀の分際を明瞭にせざりしより來りたる立論なるが故てあります。其他東西古今の哲學者宗教者等がこの天地萬有の各自相互に主觀客觀の兩觀ありて、客觀すれは相互に平等となり原料となり主觀すれば、相互に差別たり個体たると同時に、其主觀して固体となり差別となり、客觀して平等となり、原料となるのは、平等となる的と差別となるものとの二体あるにあらず、其實一体の發顯活動に過ぎざる分際等を明かに悟入開悟すること能はずして、唯其の半面の平等なるものを以て本体なりとし、其の本体より、天地萬有は發顯したる差別現象なりと誤信したる次第てあります。私が總ての誤謬を訂正增補せんとするは、實に此の如き處てありまする、かくの如き處は允に天地萬有の根本本義にし

て、其の相對的人生に應用する點のみにても、少かざる大影響あることを信しまするが故であります。

勿論、平等即差別、現象即本体と云ふことは、印度に於ける佛敎にも、希臘を始めとして歐州の哲學にも說明してあります。然れども、其說明たるや、平等は此の如き者て、差別とは此の如きものである、本体とは此の如きもので、現象とは此の如きものである、例へは波は差別なり現象なり、水は本体なり平等なり、而も水の外には波なく、波の外には水なし、故に平等即差別、現象即本体であるとて、單に平等本体其的と差別現象其的とを說明したのに過ぎないのであります。未た平等差別本体現象の由て來る所をば、明確に說明し得ないのであります。是ではまだ平等差別本体現象其的をも明確に承知したる者とは思はれませぬ。それは平等のみの境を認むるとすれば、其平等とは不平均のないものである、不平均のなきものとせば、動靜すること能はさるもので在矣、動靜すること能はさるものは量も爲すこと能はさるものてある。一分の空隙なきか故に、之を現象と觀するも、均しく平等一圓の現象にして、亦差別と云ふ現象は發すること能はぬ次第てあります、水が波を爲すは空間が存するからであります、もし一分も空間なきものとせば、其水は波を爲すことは出來ません、彼等は水波の比喩を以て得たりと自得すれども是ては未だ水其物の質さへ辨せぬものてあります。而して、比喩ならさる眞實眞の平等体差別現象をば、未だ會得せさる者なりと云ふも致方はないのてありませう。彼等は唯、平等と云ふ以上は、總て平等にして、差別と云ふ時は直に差別てあると云ふことのみを知りて、相互に差別となり個体となりつゝあると云ふことを知らぬからてあります。即ち主觀すると共に客觀し、客觀さるゝと共に主觀しつゝあると云ふことを辨せぬからてあります。私の述へまする本体とは主觀すると共に客觀し、客觀すると共に主觀するか故に、其本体は一分の空隙なしとするも、(勿論空隙のないものてありますが)。本体其的は活動するものなるが故に、その活動の一分部分か主觀して自己を認むれば、他の分部は空間原料となり居るのてあります、例へは人類が主觀して自己を認むれば、その客觀したる所の一分部は空氣原料となり居るか如き者て、更に空氣其的か主觀して

自己を認むれば、人類は客觀されて空氣原料となりて居るのであります。已に例を示したるか如くベストの如きは幾百人の人類を客觀して空氣と見、原料と見て、人類が空氣中を呼吸歩行するか如く、自由に人身中を通過するのであります。そこで、均しく平等即差別、本体即現象と云ふのでも、其の意味に於て大に異なる所のあることが判然しましたであります、況して私の信する本体とは平等差別の併發する所を差したるものにして、平等のみを本体と云ふのではありません、それは已に前々よりくりかへし〳〵述へたる所にて夙に判然して居ることゝ思ひます。

全体主觀のみすることの出來ざると共に客觀のみすることも亦出來ざるものであります、する、其の主觀すると云ふは、客觀に對立しての主觀にして、客觀に對立することがなければ主觀すると云ふことも、客觀すると云ふは、主觀に對立して後の客觀にして、主觀に對立することなければ客觀することもなきものであります。コレ迄の宗教者哲學者の主觀客觀と云ふは、單に差別上の主觀客觀を言ひ顯はしたるもののにて、この差別上の主觀客觀を超絶すれば、平等地に歸するものと確信して居るのであります。其の平等地と云ふも、その實は亦一種の大客觀でこそあると云ふことを知ざりしものであります。況して、其の平等と云ふことは、差別に對照したるの半面にして、決して全面たるものにあらずと云ふともを眞實眞に發見することの能はざりしものでありました。故にこの平等なるものが斷して本体とすべきものでないと云ふとは彼等の夢想にも知らざりしと同時に、更に又主觀的成格差別、客觀的原料平等を超絶して後の大主觀大成格あることゝ、主觀客觀を超絶して後の大客觀大平等あることをも知らざりし次第であります。

而して彼等の主觀客觀を超絶したる境と云ふは、均しく亦超絶後の大客觀に落在せざれば、大主觀に落在して居るものであります、假令は物質學者が客觀して勢力のみと認め、主觀上の心性なるものを客觀上の勢力に同化混成し、主觀も勢力なり客觀も勢力なり、勢力は主觀客觀を超絶したる唯一絶對の境なりと主張するも、其の實主張しつゝある所の勢力なるものは、主張する其人の心性てこそあります、唯其の心性を勢力なりと觀したる迄にして、その終結する所は、均しく大客觀的平等の勢力に落

在したるものてあります。更に假令は心理學者哲學者の一派が主觀しては、心性なるものを認め、客觀しては理性なるものを認め、その客觀上の理性を主觀上の心性に同化渾成し、主觀も心性なり、客觀も心性なり、均しく心性なり、心性は主觀客觀を超絶したる絶對妙境なりと主張するも、其の主張しつゝある所の心性なるものは、其の人の心性にして其の人の心性としては個性なるが故に、大客觀的平等の理性に換ゆるに心性を以てし、其の理性に換へたる平等の心性を大客觀的天地萬有に應用したるものであります。唯その立論の順序に秩序ある軌範を用ゐたるに過ぎざるものであります。もしそれ全然、主觀を除き客觀を除き去りたる後は其の主觀客觀を發顯する其の的なきが故に、主觀兩觀を超絶したる絶對不二の靈境と云ふことも想像すること能はざるものてありまする、結極すれば何的と云ふ的もなきに歸着するであります。然れども、何的もなきと云ふことは、如何なる法方を用ゆるとも、想像することは出來得ざるものであります、何人も無を有とし、有を無とすることは不可能の事であります。己に何的か存せざる可からず、存ずるものとせば、其の的は其の的のみにて何等の行動なく、泊然として實在するものではありません。其的として實在するからには、何等かの活働なくしては決して實在すること能はざるものであります。其の的の實在する以上は、斷然、其の的のみとして安閑泊然に實在するものではありません其的相應に活働するものであります。故に其の實在する其的は、主觀すると共に客觀して活働し客觀すると共に主觀して活働し、或は主觀を客觀に渾成同化し主客兩觀を超絶したる大主觀となりて大活働するものであります。斷じて一觀のみの活働ではありません。活働又活働少しも休息する所あるものではありません、動動にあらず靜靜にあらず、動靜一体、動々靜々と回轉圓滑に活働大活働しつゝあるものであります。全神致の發顯するは實に此等の點にあるのであります。

第五章　全神教立義の前提（第二）

第廿四節　有形無形の根本

夫れ已に說明したるが如く天人萬有は一体なるものであります、この一体なる的は主觀すると共に客觀し客觀すると共に主觀し、更に主觀客觀を超絶するの大主觀となり大客觀となりて活働するものでありまする、決して主觀のみし客觀のみするものではありません。又平等のみのものでもありません、差別のみのものでもありまする、相互に主觀し、相互に客觀し、相互に平等となり、相互に差別となりつゝあるものであります而も平等なる的と、差別なるものとの二体あるにあらず、又、客觀する的と主觀する的との二体あるにもあらず、唯その一体が主觀大客觀しては成格たり差別たると共に客觀大客觀しては、原料たり平等たりつゝあるのであります。私はこれを稱して英靈と申します、この英靈が實に天地萬有の本体であります、この本体たる英靈より天人萬有の活劇は演せられつゝあるものであります、人類としての英靈は、人類としての英靈相應に人生觀宇宙觀を爲しつゝ活動しつゝあります。さてこの英靈は有形のものでもありません、たゞ人類英靈の發動機たる五官を分域して、有形無形の感をなし、有機態無機態の相を發するものであります。この英靈の活動狀態をば、その活動狀態の一なる五官に權衡分域して、其の五官に上らざる空氣、香、聲、溫冷等を以て無形とし、その五官に上る所の山河草木鳥獸筋肉等を以て有形とするのであります。然れとも其の有形とする所の的も時々刻々に死斯態となりて無形に變しつゝありまする、形ありと云ふもの決してと云ふ空氣等も、漸々結集しては形あるものとなりつゝあるのみならず、其の形なきの空氣を煽動すれば、吾人の節肉に接着しつゝおりまする、これ形なきものの決して形なきにあらず、有形でこそあります。（大日本世界教宣明書第六十一節參考）

第廿五節　心肉不二一体

これと均しく吾人人類の英靈が活動して、その五官に上る所のものを肉体と認め、五

官に上らざるものを以て心性なりと念じたるものに過ぎません、肉体は時々刻々に分散して無形となりつゝあるものにして、有形決して有形ではありません。其の心性の如きも念々微細なる状態あるものにして、無形決して無形ではありません。その證據は心性と云ひ、筋肉と言ひ、決して別物なるにあらず、これが心性ぢや、これが肉体ぢやと別物にすることは出來ません、心性なる一体と筋肉なる一体との二体ありて、吾人人類を成立しつゝあるにあらずして、均しくこれ同一体なる英靈の發顯であるからであります、故に曰く唯その五官に上るものを以て肉体とし、五官に上ざるものを以て心性となしたるに過ぎませんと。假令は吾人の心性なる者も、智識情感意思の三心あるのではなく、唯この心の規則的に發動する範圍を智識と稱し、主宰的に發動する範圍を意思と稱し、客觀的觀察を主觀に訟へて發動する範圍を感情と稱するのであります、均しくこれこの心にして、この心の活動する範圍程度の其の一分部の範圍程度を抽象して、意思と云ひ、智識と云ひ、感情と云ふに過ぎずして、均しくこれこの心の活動でそあります。これと同しく人類英的靈の活動する範圍程度を其の英靈發動の一たる五官より分域權衡して、心性と言ひ、筋肉と云ふに過ぎざるものであります、五官に障碍接着する範圍程度を筋肉と言ひ、五官に障碍なく接着せざる範圍程度を心性と言ふのであります。均しくこれ英靈なり英靈の活動狀態でこそあります。筋肉と云ふもこの英靈なり、心性と云ふもこの英靈なり、均しくこれ英靈なり英靈の活動狀態であります、故に心性の外に別に筋肉の存するにあらず、筋肉の外に別に心性の存するにもあらず、均しくこれ一体の英靈であります。其の有機態無機態の既別も亦然り、人類の感官より權衡して、其の意思的生活が人類の意思的生活に近接し得たるものを認めて、有機態とし、然らざる者をば意思なきものと認めて無機態となしたるに過ぎません、萬有一として意思を有せさるものはないのであります。然るをコレ迄の宗教者哲學者は、この感官的分域の權衡あることを究めず知らずして、心と肉との別物に存するものと誤信し談信しては古今東西ともに均しく心と物との二体ありとなし、或は心を本として肉は心の發動した結果なりとするものあり。或は肉を本として心は肉の發動

する結果なりとするものがあります。然れども心と物とは何故に二体として一致し居るか。又は無形なる心より如何にして有形なる肉の發顯せしか。有形なる肉の如何にして無形なる心を發顯せしかと云ふに至りては、何れも未だ以て明かに之を解答することは出來ないのであります。（大日本世界教宣明會第六十二節參考）

第廿六節　心理物の發顯點と古今誤解の本源

これと一般其の客觀上に向ても、彼我同一英靈たる天地萬有の活動する或る範圍程度を抽象しては物質とし、或る範圍程度を抽象して、理性とし、或る範圍程度を抽象して心性なりとしたのであります。即ち規則的に活動する範圍程度を抽象して理性とし主宰的に活動する範圍程度を抽象して心性とし、障碍的に活動する範圍程度を抽象して物質としたる次第であります。而してその物質は五官に障碍ありて、心性と理性とは五官に障碍なきが故に、一を有形とし、一を無形として二物あるものとし、或は一物の發顯したる結果なりとして、心と云ふ一元說を唱へ、物と云ふ一元說を主張し。

或は心物對立の二元說を唱導するのであります。然れとも其の物質より心性理性の發顯したる所以は說明すること能はず。心性若しくは理性より物質の發顯したる所以も說明すること能はず、或はその二元兩立して一致しつゝある所以をも說明する能はず唯、其の理性とか法性とかに重きを置くものは、理性が宇宙萬有の根本本体であると云ひ、或は物質とか、心物二元とかに重きを置くして、イヤ法性が根本本体であると云ひ、或は物質であると云ひ、イヤ心物二元が根本本体であると三千者は、イヤ宇宙萬有の根本本体は物質である、年間の久しきに渉りて甲論乙駁し、東西古今とも未だ之れを決定すること能はざりし次第であります。

サテ心性と云へば宇宙萬有悉く心性なり、理性と云へば悉く理性なり、物質と云へば悉く物質であります。故に古今東西とも、單に其の理由を反對にして相互に相爭ふたる迄にして、未だ其の全き解釋をなすこと能はざりし次第であります。佛敎の如きは、其同一佛敎にして、或は唯心所造、心外無法、萬法唯心と云ひ、或は法身と云ひ或は法本位と云ひ、人本位と云ひ、或は色心二体を建立し、或は人法一体を主張し、

殆ど其の統一決定するとは能はずして、五里霧中に彷徨しつゝある次第であります。佛敎にして尙且此の如し、況んや其他の宗敎哲學に於ては、之れを決定すること能はざりしてと、又無理ならぬ次第であります。

心性も理性と見れば理性となり、理性も心性と見れば心性となるが如く、又物質も理性心性と見れば心性理性となり、心性理性も物質と見れば亦物質となるからであります。然る所以は、均しく之れこの的にして、この的たる英靈の發動にして、其の英靈の發動範圍の程度たるに過ぎざるが故に、心性の外に別に理性あり、理性の外に別に物質あるものにあらず、均しくこれこの的にして、この的たる英靈の發動なるが故に發動狀態なるが故に、其の發動狀態の或る程度範圍に重きを置くときは其の所が直に根本本体の如くに思はるゝに至るからであります。然れども其的の發動としては同一英靈の發動にして異る所はありません、惟その發動の一部分を範圍して程度を爲すに過ぎない、例へば同一の水の發動する範圍程度を稱して、是れ雨なり、霜なり雪なりと云ふと一樣であります、故に其の發動狀態の或る程度範圍に於ける雨のみを以て根本本体とすべからず、雪のみを以て本体とすべからず、霜のみを以て根本本体とすべからず、其の根本本体は水である、英靈であります。而も雪を根本とすれば霜も雨も雪より出るか如く見へ、霜を根本とすれば雪も雨も霜より出るか如く見へます。雨を根本とすれば雪も霜も雨より出るか如く見へます。然れども、雨も水なれば、霜も水なり、雪も水なり、總て水の發動變化なるが如く、心性も英靈なり、理性も英靈なり、物質も英靈なり、總て英靈の發動變化であります。故に其の發動の一變化を以て根本本体とはせられません。根本本体てなきが故に心性と物質とを除きては、別に指摘して之れが理性なりと說明することも能はざるが如く、理性と物質を除きては、別に指摘して是れが心性であると說明することも能はざると共に、心性理性を除きては、別に是れが物質であると說明することの能はざるものであります。これ等は皆其の一角一變化なる雨や霜や雪やを着眼して說明するに過ぎざれば其一角一變化たる活動狀態の理性とか法性とか元素とか物質とか心性とか精神とか云ふも、のを以て宇宙萬有の根本本体とはなすべからざること明かなる次第であります。若し

二方が物質を以て本体也とすれば、一方は理性を以てし、一方は心性を以て對立するのであります。然れば其の説明の點に於て長短純雜の差こそあれ互角の角力となるのであり矣。恰もそれ兩霜雪たる三ツの根本本体を出顯するの結果となりまする、さりとはいつれも根本本体にして亦いつれも根本本体とするには足らざる者となります故に根本本体とは一体なる水あるのみ、一体なる英靈あるのみにして、その一体なる英靈の發動機たる一部の五官に權衡分域して、更に其の發動たる狀態の或る範圍程度を有形とし、無形とし、主觀的自已に解釋しては心性とし、理性とし、肉体とし、更に客觀的宇宙萬有に向ては、理性なり精神なり物質なりとする次第であります。全神敎の發顯するは實に此處にあるのであります。

第廿一節　本体と大本體の解釋

却説この本体たる英靈は如何にして發顯するかと云ふに大本體のあるありて、其の大本體の活躍する結果であります、大本體の天照活躍しつゝあると云ふことは、如何にして知り得るかと云ふに英靈其的の發顯たる現象に徴して之れを證入することが出來るのであります。

第一段　半面の平等と位置中心、及、主觀的大神

ソハ英靈の半面たる平等地より觀するに、其の平等地と云ふとは、質に於ての平等たることを證明し得るも、其の位置に於ての平等たるとは何人も證明し能はざるものであります。其の質は平等なりとするも、質其的の位置には經あり緯あり、恁く同一位置を占むることは出來ざるものであります。換言すれば質其的は其的の實在する以上――其の實在相應に經緯の生するものなるが故に、直に上下八表と中心との位置を爲すものであります、質として實在する以上は、直に質としての量を有するものであります、量なきの質と云ふことは、亦何的を以てするも決して證明することは出來ません。已に量ありとすれば、其の量には經緯を生し四方八表、上下表裏、中心等の位置を有するものなることを知らるゝのであります。故に質としても、其質として實在する位置には、已に東に存するものと、西に存するものとの量

をなし、別をなし、決して同一の位置にのみ實在するとは云ふことはないのであります、今夫れ此の質には質としての量あり、位置ありと申すことは。質は質としての位置に準して、質としての大小長短輕重厚薄があり、又云ふ意味であります。故に其の質としての量にも亦大小輕重遠近強弱があるのであります。若し夫れ質としての質は平等のみとせば、その量としての量も亦平等であります、已に質も量も同し く平等なりとせば、宇宙萬有の發顯するに於て、又平等なる一物より外、發顯すること能はざるに歸します、宇宙萬有の大活劇は遂に見ることは出來ません。然れども、平等たる其の質に於て、質としての長短厚薄 強弱等のあるが故に、量としても又その量相應なる長短厚薄 強弱等があるからであります。要するに、質は質として大小輕重ある者であります。質は質として分分活動しつゝあるか故に、其の分分の活動と共に分分の量ありて活動し、質は質としての量あると共に、量は量としての質あり、質量一体に活動大活動しつゝあるのであります。世の多くは、質は質としての量あり、量は量としての質あるのであります。

ことを究明せずして、殆ど質と量とを別々に分離してこれを解釋し、質としてはドコ〳〵迄も平等なりと信じて居るのであります。勿論、質としては平等なるには相違なきも、其の平等には已に平等としての量あり異同あると故に、量の差別としては亦差別としての質あり平等あることを會得せぬからであります。質の外には量なく、量の外には質あるものではありません、然るを質と量とを別別に觀ずるが故に一方の平等地を以ては質とし本体とし、一方の差別地を以ては量とし現象なりとするが如き誤謬を生じたる次第であります。

已に質として實在するものは、必ず質としての量あると共に、その量としては亦量としての質あるものとせば、其の質にも量にも、量質一体としての中心あることも明瞭なる次第であります。更に質その的は單に其的として頑空なるものではありません、若し頑空なるものとせば、質其の的の實在すること能はざるばかりでなく頑空その的も存すること能はざる譯けであります。而も無は有とすると出來ざる

と共に、有は無とすることも出來ません。天人萬有の宇宙が實在することは、如何なる方法を以ても滅却することは出來ません。然ればうの實在いたしまする以上は必ずや活動するの威嚴を有するものであります、其の威嚴の活動するや、其の質は質としての量あり中心主腦あるものであります、═威嚴とは質としての量の中心主腦の異名であります、是れは質としての量、量としての質たる、質量一體の原料的平等的中身點を客觀大客觀したるものであります、

夫れその實在する其の質には、質としての量あり威嚴あり中心主腦あるものとせば其中心主腦としての質量一體の的は何ぞやと申しまするに。之れを主觀大主觀すれば、其の中心主腦なる質としての量、量としての質、質量一體其的が其的を主觀大主觀すれば神て在矣大神て在矣、中心主腦たる質量一體の上下前後左右等に於ける質としての量としての發動は天人萬有て在矣、宇宙てあります。是れ客觀大客觀たる質として量としての平等的原料的中身點たる半面を主觀大主觀したる者てあります。

第二段　中心四圍の主觀大主觀と差別的半面

質量發動の中心及び四圍を主觀大主觀すれば、是れ直に神なり大神なり、天人萬有なり宇宙なりてあります、千差萬別てありまする。則ち千差萬別でありますれども、其の成格の千差萬別たるや、決して漫然たる秩序なきものてなく、偶然として發顯しつゝあるものてもありません、悉く、皆一定の規律を爲しつゝ行動しつゝあると共に、其の統一する圓滿極上の大成格が實在するものてあります。若し此の大成格が實在するとなくば、萬有は向上することと、向下することとの必要はないのてあります、向上向下せざるのとせば、其の的は進退なきが故に、萬有は亦萬有として存することさへ能はざるに至りまする。之を人類に徵しましても、其の向下を厭ふて向上を求むるの切なるは、人類以上に圓滿極上の大成格あることを悟入せらるゝからてあります。うの大成格とは神てありまする、大神てあります。これは質としての量、量としての質たる、質量一體の成格的差別的中身點を主觀大主觀したるものてあります。

而して其の大成格なる者を客觀大客觀すれば、大成格其の的より客觀大客觀すれば

之れ直に質としての量の中心なり主脳なり威厳なるものであります。是れ主観大主観たる質として量のとして差別地なる半面を客観大客観したるものであります。

第三段　大本體、本体、現象と太神英靈萬有

この客観大客観して平等視原料視するる半面と主観大主観して成格視差別視する半面との大中身は即ち本大體なるもの、てあります。太神たる者であります。平等的質が質としての中身より量をなし、千差萬別の質量をなすが如く、差別的量たる質としての中身より更に質と量とをなし、千差萬別の成格を發顯するのである。この平等と差別との全面を全顯する大中身がこれその大本體であります。太神であります其の大本體たる太神より煥發天照する稜威が英靈であります。神は主観大主観すると共に客観大客観するか故に、英靈あり、萬有あり、時間空間あり宇宙ある次第であります。此の英靈は質としても分分に活動して量を爲し、量としても分分に活動して質を爲し、質量一体として分分に活動飛躍しつゝある者であります。故にこの英靈が各自相互に主観大主観と客観大客観するを以て、相互に平等たり原料たり差別たり成格たり時間空間たり萬有たり宇宙たるので、うの相互に原料たり平等たり成格たり差別たり時間空間たり、萬有たり宇宙たるのが現象であります。されば宇宙、有の根本本体は、英靈にして、英靈の根本本体は、是れ此の大本體であります大本體とは即ち神なり、大神であります。

第四段　時間空間と宇宙の四圍、及、無始無終と非有限非無限

然らばその萬有宇宙の四圍は如何なる現象なるかと云ふに有限にあらず無限にあらざるものであります。

是れ迄東西古今の宗義學説には、緯としては時間の無始無終なることを決定することを得ましたが、其の經としての空間に至りては、何れも未だ決定し居らざるものであります。東西古今とも均しく曰く有限にあらず、無限なりと。若し夫れ有限にあらずとせば、亦無限でもないのであります。なせなれば、有限無限と言ふは、必竟相對的の言葉にして兩立するものであります、有限にあらずとせば、無限なりとも言はれませず、有限なきに獨り無限と云ふとも、其の何等の意味をも發表するこ

の能はぬからであります。假令は夫なき婦に向て妻と云ふ名稱を下すこと能はざるが如く、東なきに西ありと云ふ可からざると一樣であります。且夫れ四圍を以て無限なりと云ふは、必竟、人間の智識には限りあるを以て、其の限ある智識にては宇宙の四圍をば究明すること能はざるか故に、之れ無限なりと云ふに過ぎざる次第であります。何人も無限なりと云ふことを究め盡して後に無限なりと云ふのではありません。故に人類の智識が漸々進歩するに從つて、天体の行動も漸々明瞭になり、人類としての四圍は、次第〳〵に擴張せられ、曾て無限なりとしたる領分も、亦次第〳〵に有限の領分に變しつゝあるのであります。よしや、有限の領分が、擴張すると共に無限の領分も共に擴張しつゝありとするも、兎に角に四圍の漸漸と明瞭になりつゝあることは、事實であります。有限無限と云ふことは、必竟、人類普通の智識經驗を程度としての名稱にして、これを以て宇宙萬有を權衡せんとするのは、餘りに短慮淺薄なる仕方なるかと思はれます。何となれば、人類より觀して、有限なりと云ふものも、之を仔細に究明すれば、天地萬有、一として限ある者なく、悉く關聯一致して居るのであります。己に天地萬有は有限にあらずとせば、又無限なりと言ふことも出來ません、有限のなきに、獨り無限のあるべき理由はないからであります。

抑も宇宙を以て無限なりとせば、神としては神其的の實質如何をも知ること能はざるの愚に歸着致します、己己を知ること能はざるものを、如何んぞそれ神として尊ふべき所がありますか、その中身主腦なくして宇宙萬有の實在變化するとが何して出來ませう、無限なりとせば規律秩序は立ちません、宇宙萬有は構成せらるゝものでありません。是迄の哲學者宗教者が皆此の如きの矛盾あることを發見せずして居りましたのは、洵に氣の毒の感に堪へません。

已に緯に於て時間の始なく終なきものなりとせば、經に於ける空間に於ても、亦有限にもあらず、無限にもあらざるものでなくてはなりません。然らば其の有限にもあらず、無限にもあらざる其的は何なりやと云ふに、神なり神の稜威であります。神の稜威の至らざる所は如何と申しますか。神の稜威の到らざる所は思量することも能

はず、そはその的のないからであります、ないと云ふ其的も亦ないのであります。されば神は稜威としての内のみを知り、外を知ること能はざるか故に依然内存説なりと云ふか、已に外と云ふ者のないとすれば、亦内と云ふこともないのであります亦太神としては客観大客観して稜威英靈時間空間宇宙萬有を観するか故に、其の御面貌は赫灼として天照せられつゝあるのであります。太神と英靈との主観大主観客観大客観する活動と共に時間空間の發するものであります、時間空間のみ、英靈萬有以外に實在するものではありません、東西古今の哲學者宗教者は悉く此の時間空間の發顯する分際を究明すること能はず、獨り「カント」に至りて時間空間の客観的に實在することを主論したりと雖も、これ人類より客観したる時間空間にして時間空間其の的として、別に實在するのではありません。唯この英靈萬有の相互に主観客観するよりして、相互に成格を顯はし、相互に時間空間となりつゝあるのであります。假令ば空間自ら主観大主観すれば、均しく分分の位置に於て分分の自己成格を認めつゝあるものであります、人間より客観すればこそ空氣なれ、空氣其の的より主観すれば、又均しく人間の如く活物としての自己成格を認めてこそ活動しつゝあるものではありませんか、空間と云ふ者も、亦神と萬有以外に別に實在するのではありません。

且夫れ時間の無始無終なるに非ずして、大本體なる太神か、無始無終なるが故に、其の太神ととての質量成格威嚴の發動たる經過の一狀態を緯に究明して時間と稱するに過ぎないのであります、時間のみ抽さて豫想し得らるゝものではありません。則ち質量に伴ふの時間であります、大本體たる太神の質量成格威嚴の一象印たるものであります。然れども大本體たる太神ありて而して後に時間の發するにあらず、已に大本體の神とし云ふ時は、共に時間の存するものであります。大本體たる太神は無始無終なるか故に、其時間は直に是れ無始無終の時間であります、その空間に於けるも亦左様であります。

第六章　東西古今の宗義學說と全神教との關係

今夫れ私は第貳章より第五章までに於て、東西古今の宗義學說を論破すると共に、私は私としての主張を御物語り致しました、是より全神教としての本義を申述べまするが、猶茲に一言申上けねはなりません。他なし、私はかく庶物教、多神教、一神教、萬有神教、自然神教、汎神教、理性教、儒教、佛教、基督教、回回教及び、唯心論、唯物論、心物二元論、唯理論、多元論、勢力論、自然說、怪疑說、等の東西古今の哲學者宗教者が立論立說したる者を悉く論破し去りましたなれども、さればとて、全然以て取るに足らざるものなりと申すのではありません。其の各自が東西古今に於て立論立說したる宗義論旨は、亦是れ其の當代に於ける宗義論旨として、之れを認容尊敬するもので在矣、唯ろの人生宇宙に於ける當時相當なる解釋實行として之を認容肯定する部分〳〵の解釋として、之を認容肯定する次第であります。世界列國東西古今に於ける世界列國の當時は、いつれも山河懸隔して雲

烟萬里たり、一局部に於ける群小國あることを知らざりし智識經驗なるか故に、其立宗立論の範圍狹隘なりしは、蓋し無理ならぬ次第であります。且その智識經驗等の發達も、その發達には逐次順序あるを以て、いつれの國もその順序を逸脫して突飛突行することを能はざるものであります。故に古今東西列國の立宗立論は、殆と符節を合するが如く、初めは唯物論より起りて、唯心論となり心物二元論となり、純理性論となり、純法性論となり。現象論より起りて本体論とはなり、現象即本体論となり、差別門より起りて平等門となり、差別即平等論となり、無神無佛より起りて有神有佛となり、現世より起りて過去に及び、未來に遡り、いつれも自家自國の立論立神を以て眞正なりとし、他家他國の立論立神を以て邪法なり、魔神なりとし、一に唯、我あるを知るのみ他あるを認めず、古今列國の歷史は殆とその轍を同し、符節を合して居ります。是れいつれも人間としての智識經驗發達の逐次順序たることを證明するに足るであります。もしもその中、人間以外、眞の神として佛として、その立論立宗は、覿然類を異にして、ろの一國

丈は亦人類以外の歴史を爲し、赫灼仰ぐべからざるものがなくてはなりません。人類の智識經驗を以ては、毫も攻難詰問せらるへき餘地なき迄のものでなくてはなりません。然るに、いつれの立論も立教も、皆その國前代よりの學系教統を相續して、之を發達せしめたる立學立教でこうあります。例へは孔聖の堯舜を祖述し、釋尊の波羅門教より胚胎し、基督の猶太教を簡約したるが如き、いつれの立論立説も悉く前代を祖述進歩せしめたるものであります。故に、その欠陷に於ても亦古今東西とも、其歴史を同ふして符節を合して居ります。されば後世子孫たる我等が世界列國一望歴然たる今世紀に於ける一人として、古今東西列國の學統教系を相續究明し、その欠陷を增補修正すると共に之を總合統一し更に之を進歩大成せしめんとするとは、人類發達の逐次順序として、最も當然なることゝ存じます。是れ私の增補大成するのでなく、今日の時代が增補大成するもので、寧、各學説各宗義其的が其的自からして增補大成總合統一するものであると存じます。前義前説にして欠陷なくば、いかでか私の如き鈍根劣機至愚至痴なる者が、かゝる大膽なる企を爲すことが出來ませうぞ。是れ前義前説が時代時代につれて進歩發達し來るが如く、今日は今日相應に、又其前義前説が

それ自身に增補大成總合統一して、全神教とこそなりたる者ので在矣、私の力ではありません。さてその增補大成總合統一したる全神教より見ては、古今東西の立學立教よ、悉く一局一部分の解釋にして、未たその全きに達せざるものとはするも、されはとて、全然之を采るに足らざるものとして否定することは出來ません、その一部分づゝの解釋あればこそ、茲に全部全面の解釋が起り來るもので、彼此相待て全きを爲すものであります。故に一部分の説は一部分の説として、全神教中に保存するに足る、保存すべきもので、保存せねばならぬものであります、いかに一部分づゝの解釋なればとて、それ丈實顯したる過去の歴史は磨滅すへからざると共に、その現在將來に及ぼす歴史も亦以て磨滅せざるものであります。全神教は悉く采りて、之を一局部に保存するのみならず、之に新生命を灌潮して、更に一局部としての新活動を爲さしめんとするものであります。故に世もし基督教以上を信することを能はざる人人ありとせば私は其人人に向て基督教を説き、共にアメンを唱へます、是れ今日以前三千年以前

の人人として、私もその時代相應の人となりて共に與に基督教を究明し、究明したるの極は、その欠陷あることを知らしめて、更に全神教に導かんとするのであります。而も其人人の欠陷あることを發見する丈の智識なきものとせば、唯、共に基督教を說き、アメンを唱へて、其人人を慰籍致します。佛教以上を信すること能はざる人人なりとせば、私は其人人に向て、佛教を說き、共にその宗派〳〵の本尊佛を贊美して、安身を勸めます、是れ今日以前三千年以來の人人として、私もその時代相應の人となりて、共に與に佛教を究明し、究明したるの極は、その欠陷あることを知らしめて、更に全神教に導かんとするのであります、而も其人人の智識經驗は、その欠陷あることを發見するに足らすとせば、唯、共に佛教を說き、その宗派の歸依佛を稱名して、其人人を安立せしめます。全神教より觀すれば、佛教も基督教も、更にあらゆる學說宗義も、總て全神教としての一部分の學なり教なるか故に、先づその人人の智識經驗相應に一局部の安身立命を與へて置くのであります。それがゆかりとなりて、この世に於て全神教を信すること能はすとも、未來淨土に於ても、天國に於ても更に全神教を信するに至るのであります。尊、佛教基督教等を信仰し居るのは、已に全神教の一部分を信仰し居る過渡路であります。

第七章 全神教

人生宇宙の本体は英靈なり英靈の本体は神なり神は本体の本体なり大本體なり。大本體としての神は主觀すると共に客觀し、客觀すると共に主觀し、更に主客兩觀を超絶するところの大主觀大客觀とのありて活動大活動するものであります。故に英靈も亦主觀すると共に客觀し、客觀すると共に主觀し、更に主客兩觀を超絶するの大主觀大客觀とのありて活動大活動するのであります。萬有の總てが相互に主觀すると共に客觀し、客觀すると共に主觀いたしますするのは、其の本体たる英靈が然るからであります。其の大本體たる神其的が然るからであります。大本體たる神は主觀して自己を發顯するが故に、他觀して英靈萬有を發顯いたします、神若し主觀して自己を燒發すると共に、客觀して他の英靈萬有を發顯天照することがなければ、自己其的を

も煥發すること能はる次第てあります。故に英靈萬有も亦主觀して自己を發顯すると共に、他觀して他の實在を認むるものてありまする。大本體たる神は、自他平等の天照なり、故に英靈萬有も亦自他平等の主義實行てなくてはならぬのてあります。大本體たる神の實在と共に英靈萬有は實在するものてあります、神ありて後に英靈萬有のありと云ふてはありません、已に〳〵神の實在すると云ふ時は、同時に英靈萬有の實在いたして居りまするものにて、前後あるものてはありません。而も大本體たる神と英靈たる萬有との二体ありて根本を異にする者ではないのてあります。

神の主觀して自己を煥發すると共に、其の神の稜威は同時に神より客觀せられて、英靈たり萬有たり時間空間たり宇宙たりつゝあるのてありまするとと共に、其の英靈は亦相互に主觀して神となり萬有となり、時間となり、客觀しては英靈たり空間たり宇宙たりつゝあるものてあります。英靈とは神より客觀したる神の實なり成格也。英靈其的より云へば、他觀したる神の稜威也。稜威とは英靈萬有より客觀したる神の稜嚴てあります。英靈其的が主觀すれば、直に個々の神たると共に、客觀されては相互に英靈たり、又、稜威たりつゝあるのてあります。

神自ら主觀するときは、萬有一切を救濟攝理すると共に、他觀しては萬有一切に神の稜威を賦與せんとし、更に主觀客觀を超絶しての大主觀たる神たると共に主觀客觀を超絶しての大客觀たる英靈萬有となりつゝあるものてあります。

神の主觀中には其の主觀としての客觀あり、客觀中には客觀としての主觀あり、更に主觀客觀の中にも大主觀としての大客觀あると共に大客觀として大主觀があるのてありまする。故に英靈萬有としては、主觀して自己を認むると共に客觀して他を認め、客觀して他を認むる共に主觀して自己を認むるてあり矣。

自己を認むるときは、萬有各自に自己を發顯して、萬有一切を自己に攝理同化せされば滿足することは出來ません、客觀して他をのみ認むるときは、自己の全身を他に貢獻し盡されゝば滿足すること能はぬものてあります。然れども、他を攝理同化して自己のみとなるときは、自己其の的も自己一人としては獨立すること能はざるが故に、自己を發顯すると共に他を認容して、自他平等の發顯を期するに至るてあります、自

他平等に發顯することを得て、茲に初めて滿足するものであります。客觀して他に自己の全身を貢獻し、他をのみ發顯せんとすれば、他も亦他に貢獻せざるべからず、而も轉々貢獻するの絶極は、遂に率に貢獻する所の的なきに歸着いたします。故に客觀して他を認むると共に自己をも認むる自他平等の發顯たるに至るのであります。自他平等の發顯なれば、自他ともに滿足することを得るのであります。更に自他を超絶したる大主觀大客觀となりて、自己の自己たるをも忘れ、他の他たることをも忘るゝの自己たり他たる所の至誠となり太神たらざれば大滿足は得られぬものであります。人類萬有の神を思ひまするのは、神より發顯れたるからであります、神より出るものは神に歸る、人類の神たることを得て、滿足いたしまするのは其の大本體たる太神より發顯れてその大本體たる太神に還元超等すればであります。大本體を裏觀して客觀しますれば其の稜威は平等一圓の質なり量なりて在坐る、又表觀して主觀しますれば、其の平等一圓の質と量とは直に等差萬別の成格あり、實相あるのであります。平等一圓の質は、質としての差別あり、量は量としての差別あると共に其の差別は差別としての按分平等があるのであり、活動としての按分平等があるのであり坐ます。英靈萬有も表觀して主觀すれば、個々差別の成格なると共に、裏觀して大客觀すれば、直に平等一圓の靈性であります。

太神は表觀して大主觀すれば大本體なると共に、裏觀して大客觀すれば大靈性であります。英靈萬有の一たる人類としての成格全身、その成格全身の發動機たる五官等に權衡して、主觀客觀すれば、無形の印象となり、有形の印象となるのであります。其の印象の範圍を觀して、規則的に活動する範圍を理性と名稱し時間と名稱し、主宰的に活動する範圍を心性と名稱し、因果と名稱し、空間と名稱いたします。言葉を換へて申せば人類として、人類相應の官能より自觀し客觀する分際に於て、無形の印象となり、心性となり、理性となり、物質となり、時間あり空間あり因果あり、有形の印象となり、人生あり、宇宙あり、神あり太神あり千差萬別の活動と大活動とのある次第であり坐ます。理性とか法性とか別に存して根本たるに非ず、心性とか精神とか別に存して根本あるでなく、物質とか元素とか別に存し

て根本たるのでもありません。

人生とは、人類を主觀して、人類の生活する範圍に於て、萬有一切を客觀して人類化したる境を名稱するのであります。宇宙とは、人類萬有を總括したる主觀客觀双互攝理の大活境を名稱するのであります。神は人生宇宙の根本、發顯、終結たるの大本體であります。神は平等としての中身、差別としての大極であります。

神は大本體として、始なく終なく、有限にあらず無限にあらざるものであります。其の始を尋ぬるに始なく終を尋ぬるに終なし、有限として極むるに有限にあらず、無限として極むるに無限にあらず、神の威稜の到徹せざる所はなく、神の威稜の至らざる所としては、想像すること能はざるが故に、其の至らざる所と云ふとは、云ふことも出來ないと共に、威稜の外と云ふその外も亦ないのであります。

大本體たる神は、神たるの自己を知るものなるが故に、神としては無限無邊と云ふことはないのであります。これ其の質としては質としての活動中心あり中心がなければ活動すること能はざるものであります、是れその四圍八寒十表のある次第で在矣、四圍十表とは威稜てある、威稜のなき處には、ないと云ふ其的もない、故に四圍十表の外と云ふ其外はないのであります。又神は量としての絶頂たる次第であります、絶頂がなくては萬有の進歩退歩はなくなります、萬有は何等の活動もなきに歸します。

萬有の一たる人類が、神以上を想像することの能はざるは、神は人生宇宙の絶頂たることを知るべきであります、人類が平等的の元素とか理性とか精神とかにのみ同化するを以て滿足する能はざるのは、人類其の的の平等性たるのみにあらざるを知ると共に、其の根本大極たる大本體神の平等性のみにあらざるを證するに足る次第であります、その半面の差別体たることは、自己としても神としても、大神としても、歷然として明かなる次第であります、平等のみの境なく、差別のみの境なきことは、之れ又何よりの證據であります。太神も萬有も質量一体の者で在矣。

人類が向上して愉快の進歩を爲し、向下しては不快の墮落を感ずるのは、抑も吾人々類としての根本發顯終結の公準大公準あればであります。大公準とは大本體神であり

ます、此の大本體神がなかつたならば、如何でありませうか、質としては中心なく、何等の量をも發顯すること能はざるに至りまする、量としては唯だ千差萬別たるのみにして、何等の秩序もなく、茫然漫然、今日太陽出るも明日は出でず、今日賢者たるも明日は愚人となり、昨日の婦人は男子に接せずして今日子孫を産み、梅花は狸と化け、て顯はれ來り、人々は毒蛇と化して荒原に叫けび、家庭の組織もなく、國家の組織もなく、人類としての世界的組織もなく、天邊の星は夕に天降り、地上の石は天邊の風となり、茫然漫然、錯亂して由來することなく、偶然として來り、突然として去り、何が何やらサッパリ譯けの譯からざる盲目滅法界の亂境で、寧ろ千差萬別たることも能はざるものとなります。支離滅裂して其的自身に實在することも出來ません。本來大實在する大本體神は是の如きの亂質亂量を亂發して、其の大本體としての神を顯はし、萬有を顯はし得べきものでありませうか、決して左樣なる的ではありません大本體として實在する太神は、質としても質としての中心あり、量としても量としての大極あり、質としての量、量としての質たる質量一体の大極大中身よりして、自觀すると共に他觀しつゝ、神自身を發顯し、英靈を發顯し萬有を發顯し、時間空間宇宙を發顯致矣、英靈萬有は亦其れ〳〵自觀他觀して、人生をなし宇宙をなし、大本體神を中身大極として、發顯し終結し、終結しては更に發顯し、發顯終結終結發顯、始なく、終なく、有限てなく、無限てなく、活動大活動し、飛躍大飛躍しつゝあるものであります。故に太神としては面貌あり成格あり、臟腑のみの妖怪にあらず、超絶的の神祕にもあらず、神と云へば宇宙も神なれども、萬有も神なれども、その成格を異にす、その神神は大本體神を公準として向上向下するを以て、進退あり、廉物も神なれども、人類より客觀すれば、人類神以下の神なり。天人萬有を本位として內とすれば、太神は外にあり。太神を本位として內とすれば、天人萬有は外に在矣。神としては太神として根本中身の活動を爲すの性体を大本體神とし、其分身の活動を爲す所の分性分体を多神と爲し矣、神としては同質同量の神なれども、その質量中に於て、按分平等、按分差別あるか故に、其成格活動を異に致矣是れ一神にして多神也、多神にして一神てあります。且夫れ太神としては大活動あるが故に、千

差萬別の形式成格あり、是れその唯一主宰の神あり、八百萬神あり、庶物としての神あり、宇宙としての神あり萬有としての汎神あり、自然として、精神として、理性として勢力として、物質としての神あり、心としての神あり、体としての神あり、心体不二一体としての神あり、平等に伴ふの差別神あり、差別に伴ふの平等神あり、平等差別一体の神あり、自覩の神あり、客覩の神あり、兩覩超絶の神あり、其の形式象体としては千差萬別であります。人類の五官に楹衡して、之れを覩ますれば、其の覩し得る丈は人類としての本体に相應したる千差萬別の神々がある次第であります。人類の爲めには善神もあり、惡神もあり、善惡を超絶したる神もあります。少は一微塵より大は大宇宙に至る迄、悉く之れ神ならざるものはありません、唯或る範圍の神のみを見て、全き神なりと思ふ可からず、全き神とは大本體として、此の如き人生宇宙千差萬別の神々を活躍し、又其の千差萬別の神々は、大本體身の分身分体なりとして、その大本體の大活動に於ける部分〳〵の小活動をなしつゝある者であります。故に萬有として、特に人類としては其の人類としての英靈的本体を發顯し、活動飛躍しつゝ、大本體神に還元同化せざれば滿足するものではありません。人生に處するには人生に處するの主義目的あり、宇宙に處するには、宇宙に處するの主義目的あり。然らざれば、その人生宇宙を實行し活歩することは出來ません。主義目的なきは、恰も深夜夢覺めて茫然暗中に彷徨ひ、其の方角の定まらざると一般であります、これ人生宇宙に向て自己の成格大成格を顯すことは、斷じて出來ざるものであります。

萬有特に人類としては、其の本体として、固より是れ英靈なり神なりと雖も、其の神たり英靈たる本体は、善ともなり惡ともなり、遂には善惡を超絶したる太神とこうなるものであります。故に其の惡人たるとを忌みて善人たることを期するには、自己の神たることを自覺すると共に、念々言々行々、大本體の大神を大標準として活動飛躍せねばなりません。全神教は實に此の大本體神を公準大極として、人生宇宙に處すると共に、東西古今の宗教學説を此の如くに總合統一して、彼我均しく其の根本本体大本體を發顯しつゝ、全き神の人生宇宙を建設莊嚴せんとするものであります。

第八章　大本神としての太神の尊稱

却說、世界列國は古今共に、其の意味こそ異なれ、意義に於ける廣狹精雜等の差こそあれ、均しく皆その人生宇宙の根本を其の國〳〵に發達したる思想言語を以て讃美しつゝありまする、例へば支那人は天なり上帝なりと稱へ、印度人は佛陀なり、大梵天なりと稱へ、歐州諸國に於ては「ゴット」なり「エホバの神」なりと稱へつゝあるが如きものであります。唯其の思想解釋實行に至つては、未だ全きに達せざるものなれども皆其の全き神に達せんとしつゝある公準の行程に過ぎざるものであります。

我々の先人は、天御中主太神と稱へて、之を讃美しつゝ傳へ來つたのであります、而して東西古今の解釋實行と我等先人の解釋實行とを比較いたしまするに、何れが其の全き解釋と全き實行とに近きつゝありしかと申しますれば、我等が先人は、最よく全き神の敎と實行とを後世子孫に遺傳したるものであります、後世子孫としては實に感謝するに言葉がないのであります。

唯、神代以後の人々は、其の解釋實行を直に全き神の敎たらしめ、實行たらしむることの能はざりしと雖、其の歷代〳〵の解釋實行は當代の今日に及ぶまで、漸々次第に全き神の敎と實行とに進行せしめつゝありしこと、亦深く感謝せねばならぬであります。それ大日本國たる自己を大に顯さんが爲めには、儒敎を採用同化して、天人の關係より、人倫道德の解釋實行を高め、佛敎を採用同化しては、神人の關係より、感應道交の解釋實行を高め、更に世界列國の宗敎哲學科學を採用して東西古今一切の宗義學說を總合統一せしめんとするの大動機を大活躍せしめつゝある次第であります。大日本國たる自己を大に顯はさんとするが故に、古今に於て、均しく其の渡來の宗敎道德哲學科學等を採用して大日本國たる自己に同化いたしました、而も其根本本体に至りては、決して他に同化せらるゝことはないのであります。儒敎如何に其の說を主張せんとするも、儒敎中興の祖たる孟子の說は斷じて行はれず、その開祖たる孔子の仁義忠孝も、日本國に同化せられてこそ、初めて全き忠孝仁義とはなりて發顯活動することを得たるものであります。佛敎如何に其宗義を流布すると雖も、全然佛敎國た

らしむこと能はず、反て日本國に同化せられて後こそ、始めて佛敎としての大小乘敎理も出監的に發顯活動することを得たるものであります。

儒敎の仁義忠孝が、日本國に於て、その全き發顯活動のありたるは、故こそあれ、大和民族には人生宇宙の大本體神たる、天御中主太神と云ふ大信仰ありて、其の信仰を國家に實顯し、天上無窮の皇基を建設しつゝあるが故に、仁義忠孝の名を、うの天上

無窮の實質に應用したる者であります。

佛敎の大小乘、殊に大乘敎理の日本に發達いたしましたのは、同しく其の天御中主太神と云ふ根本大本體の大信仰を國家に實顯して、天壤無窮の皇基を建設しつゝあるが故に、其の毘盧遮那佛、大日如來、阿彌陀如來、久遠實相の釋迦如來等の色心不二一體佛が發達いたしました次第であります、即ち千年二千年三千年來相續したる　天御中主太神と云ふ大本體神の大信仰は千年二千年三千年來遺傳しつゝありますが故に、各宗の開祖たる人々は、知らず識らずの間に於て、其の大信仰の天然自然に薫發し、一その佛敎中に於ける實大乘たる遮那佛大日如來阿彌陀如來久遠實成の釋迦如來等の名

によりて、其の實を其の名に應用し、其の名の下に其の實を發達し來りたる次第であります。

佛敎儒敎の根本國たる支那印度等に於て、其の仁義忠孝と大乘敎理とか、漸々次第次第に發達すること能はざりしものは、大本體神としての根本大信仰を大發見大正覺したる人人は、少數にして、其の一般民族の念頭には來だ以て此に達すること能はざりしが故に、此の大信仰をその國家に發顯建設することの出來なかつた次第であります故に其國は興亡常なく、折角小數者の大知識ある人人が發見正覺したる忠孝仁義說も實大乘敎理も今日に至る迄、遂に卒に發達することの能はざりし證據であります。

佛敎各宗の立敎開宗せられんとするや、其の元祖の多くば伊勢　天照皇太神宮　熊野神社　八幡神宮等の神託を哀願して、之を朝庭に奏問し、或は民間に其の旨を傳へて神勅に據るものなりとして、立敎開宗したるものであります。或は其の宗〳〵開敎の靈地靈山は、悉く寶祈の無窮、國土の平安を祈禱ずると云ふ旨を以て、朝庭に奏にし更に其の御勅願と云ふ尊き大御心の下に本山大本山を建設したるものであります。皇

室の御擁護あるにあらずんば、如何てか佛教の興隆此の如くなるを得べきや、彼等は印度の思想言語に感化せられて、其の經文に於ける權實の說あるを幸として、本地垂跡金胎兩部の說等を應用し、恐れ多くも伊勢　天照皇太神宮は毘盧遮那佛なり、大日如來なり、阿彌陀如來なり或は法華護持の善神なりなど、我田引水的に附會したりと雖も本來固有したる根本信仰の遺傳は、その腦頭に相續して滅却すると能はず、只印度の言語たる三身佛の名稱に依りて、知らず識らず、天御中主太神天照太神たる根本信仰の實質を發揚したるに過ぎないのみてあります。故に亦その遺傳的根本信仰大威嚴をば、直接に胃濺することの能はざりしものてあります。彼等はいかに佛法を流布せんとするも伊勢太廟の正門に向て、本地は大日如來なり遮那佛なりとの額面を献し奉ることは得ませなんだ、如何に彼等は個人として本地垂跡の說を流布し、時に朝廷の大御心を動かせしことありとするも、萬々一にも伊勢太廟の大靈地に於て、是の如きの所爲ありとせば、神慮として、大日本國として、斷じて之を容さず、直に其の者の命脈は斷絶せられたる者て在矣。現に德川時代佛法大興隆の時と雖も、伊勢太廟には、

僧尼法体の姿を以てすら參拜することを許さゞるの禁札ありしものてありました。僧尼として太廟に參拜するときは、宮川前岸の鹿頭に於て、鑑を借り受け、これを冠りて昔を忍ぶ大和民族の姿として參拜したるものてあるとは、今日猶古老の說く所てあります。彼等にして遺傳的根本信仰なかりしならば、國民にして遺傳的根本信仰なかりしならば、悉く神社を伽監に改築し、神神を印度的佛名善神に改稱したてありませう。その公然と改築改稱すると能はざりし者は、全く國民と彼等とが先祖代代より根本信仰の遺傳せられつゝありたるからて在矣。今日に於てこそ日本國の朝野共に彼等を寬容し是の如き形式の弊に陷りつゝありしことを除きたりしも、朝庭に於ては、斷じて亦佛教を公然として宮中に奉せられず、祖國本來の神儀神律を以て大祭事を執行せられつゝあるのてあります、獨り今日のみならず、朝廷の神儀神律は、神代より轉轉相繼し昔日と雖、殿肅に奉行し、未だ曾て佛法を以て之に代へたることはありません、昔は佛法に同化したるが如きも、其の根本信仰に至りては同化せず、反て彼等をして根本信仰たる威嚴の犯す可らざるとを知らしめて、之を擁護せしめたるものて在矣。今日

は亦世界列國の科學哲學宗教をして、我に同化しつゝ、各宗各派各學說は、平等一圓に其の存在を寛容し擁護しつゝあるのであります。是れ皆大日本國としては、彼に同化するも反て我に同化せしめ、彼の同化せざるも、亦我は同化して、彼等を擁護すると共に、大日本國たる大成格を顯はしつゝあるものであります。是れ大日本皇國は昔し昔の昔より今の今に至る迄、大本體神を天御中主太神と稱へて、人生宇宙一切の現象を其分身分体と心得、苟も我の成格を發揚するに足るものは、採用同化すると云ふ大魂魄大度量あるが故に、いかなる宗義學說にても、之を採用し、之を保護し、之を阻嚼し、之を同化し、天人萬有としての根本信仰を阻害せざる限りは、其間に彼我の僻見を恣にして、自己を殘賊し、他を虐待せざる次第であります。故に儒教も佛教も、基督教も、擁護し、一切の科學哲學も採用して、自家の成格を鍛煉顯彰しつゝあるのであります。大日本皇國にして、この魂魄と度量とのなかりしならば、決して他の宗義哲學科學を採用することは出來ません、頑僻固陋にして、支那土耳古と輒を同ふするでありませう、亦採用しても、自家の成格をば喪失して、他に同化され盡

したてありませう、今日歐米諸國の如く、基督教化し、一神以外は亦他の宗教宗義を忍容同化するとの能はざる偏見に陷りたてありませう。大日本國が明治當代に於て、俄に勃興し、大に其成格を世界に顯彰發揚することを得たのは、偶然でもなく、奇跡でもなく、淵源由來する所があるのであります、數千年來遺傳相續しつゝありたる結果であります。これ實に大日本國は昔しゝの昔より今の今に至るまで、全き神の教と實行とに近きつゝありしと云ふ次第であります。已に近きつゝありと云ふ以上は、其の全き神の教と實行とを大成して、更により大に顯彰發揚し、世界列國をして、恐く全き神の教と實行とに感化向上せしめばならぬ次第であります。是れ大日本としての天職であります。人生世界に對する責任であります。其教にして行にして、人生宇宙を解釋實行するとの全き者なれば世界列國は同情歡迎し。日本國に起りたる者なるが故に、嫌なりとして排斥することは出來ません、彼等は猶太に起りたる一神教でも　印度に起りたる佛教でも、其完全なりと信する時は、同情歡迎して居ります る。是れ同一人類なり同一萬有也。その人生觀宇宙觀としては、必ずやうの全き的に

歸依一致する所なくてはならぬからであります。

大本體神としては、孰の國語を以て之を稱ゆるも不可なし、其の實体としての大意義を顯彰する言語文字なれば、國國の言語文字を以て稱ゆるは寧ろ當然の敬禮であります。然れども、天御中主太神の御名の下に於て全神教の發顯し來るは、大本體神としての大御靈は、天御中主太神として、古今東西の宗敎宗義哲學科學等を總合統一せしめらるゝにある者也とこそ感得せらるゝのであります。而も吾等日本國人として、天御中主太神の大御名の下に於て、此の如き全き神の敎と實行とを期するものは、又他の世界列國各自をして、各自は各自相互に全き神の敎と實行とを此の如くに發顯し、その何れか早く此の人生宇宙を全き神としての人生宇宙たらしむることを得るものなるか、彼我相互に相依り相導き、怠らず退かず、與に共に一日も早くその本体大本體を觀照活躍しつゝ、以て根本大極の大本體神に還元同化せねばならぬと云ふことを促かすの導火機であります。

吾等日本國人としては、先づ世界に卒先して、大日本國より全き神の敎と實行とを示すの大責任あるとを感得すると共に、大に戒むる所なくてはならぬ次第であります。大日本國人として全神敎を世界に宣明實行せんとするが故に、大日本世界敎の名稱は起り來りたる次第であります。

第九章　信仰

第廿八節　根本信仰

信仰と申すとは、其の對象を究明し、直觀し、若くは、思惟して、其對象を覺知納得し、自己の之に同化一致せんとする全身の活動であります。玆に所謂信仰とは根本信仰であります。世の中の事は、何事によらず、其の對象を信仰して、我の彼に同化するか、彼の我に同化するかの言行事業たらざるものはないのであります。而もこの世の中の信仰の發顯いたしまする所の根本があります、あらゆる總ての信仰の出る所の信仰あり、その信仰が根本信仰であります。又世のあらゆる發顯したる所の信仰の歸着する所の信仰があります。その信仰が根本信仰であります、換言しますれば

世の中のあらゆる信仰の發顯歸着する所の信仰が根本信仰であります。

根本信仰とは人生宇宙の大本體として、其の對象其的を感應直覺し、若しくは理解認識して、彼と我との一体たらんことを期しつゝ、其の對象を讃美欽仰する所の信念實行であります。若し其の對象の何になるかを窮明せず、感應直觀もせず、理解認識もせるず、唯だ、何でも乎でも無暗矢鱈に之れを信仰いたしまするは、最も向下淺薄な信仰であります。

第一段　向上致一の信仰

故に信仰の對象は、最も克く究明して感應直覺し又は理解認識し、且必ずとも、人類以上の威嚴を有する者でなくてはならぬのであります、換言すれば人類としてに卓絶したる威嚴ある者でなくてはなりません。之を向上一致の信仰と申します。

例へば人生宇宙の大本體神は申す迄もなく、人生宇宙に最も多く貢献したる現幽神たる乃祖乃先、乃君乃父、及、東西古今大聖偉人の神德を讃美感謝し、自己も亦此の如くに人生宇宙に貢献するとを期するが如きもので、是れ亦彼と我との一致を期するものであります。

第二段　向上相對の信仰

是は我の國祖に非ず、祖先にもあらず、亦我が期する所の仁人君子にもあらず、學者發明者事業者等にはあらざれども、均しく人生宇宙に貢献したる人々の紀念地紀念品なれば、其人々を追慕して、その在天の神靈を贊美し、各自應分の功德を感謝するのであります。是れその人々と一致なるとを期するにはあらざるも、その先づ我の前代に於て、人生を發達せしめたる功德を尊敬するのであります、之を向上相對の信仰とは申します。

第三段　向下相對の信仰

又人類以下の對象に向ても、對象其的を明かに認めて、其的相應の德を讃美し、之に感謝の意を表しまするのであります、之を向下相對の信仰とは申します。例へば水火草木禽獸等に對しても、大本體神の分身分体として、均しく共に人生宇宙に活動し、其分々の神德を發して、人生に貢献しつゝあるの德を讃美し、之

に感謝の意を表するのであります。我と彼とは一体分身にして、今の彼は我の爲に貢献しつゝあるとを讃美し感謝するのであります。

均しく信仰と申しましても、其の信仰には、向上の信仰と、向下の信仰と。又向上向下とも、其の對象の如何を明かにせずして、一に唯之れを直覺讃美するものと、迷信哀願するものとがありまする、而して此の信仰を實行する點に於て、他律的の行爲と、自律的の行爲と、他律的の自律と、自律的の他律とがあります。

第四段　向上超絶の信仰と對象の究明的一致

對象を明かにすると云ふことは、其の信仰する所の靈體——人生宇宙の根本大極たる靈體——其の的の如何なる成格威嚴等を有し居るかを究明するものであります、假令ば天御中主太神とは如何なる的にして、如何なる成格威嚴を有せらるゝものなるか、阿陀如來とは如何なる的にして、如何なる成格威嚴のあるものなるか等を吟味究明して、「ゴッド」とは如何なるものにして、如何なる成格威嚴のあるものなるか等を吟味究明して、其の神の何的たるとと、如來の何物たるとを直觀思惟して後に、是なれば、

人生宇宙の根本大極なる大本體たる神である如來である、我もその神その如來と同身一体たり得るものなることを廓然納得して、之れを讃嘆し、之れに歸依するのであります、これは即ち向上超絶の信仰であります。

第五段　向上超絶の信仰と不究明一致

其の天御中主太神の何的たることをば吟味究明することの能はざれども、阿彌陀如來の何的たることは究明すること能はざれども、唯その人生宇宙の根本大本體として、我等を攝理し我等を濟度すると云ふことのみ直覺感得して、其の我等以上のものたることを納得し、これに歸依し、之を讃美し、彼我の一致を期しつゝ、無上の歡喜を發するのも、均しく向上超絶の信仰であります。この信仰に於ては、唯其對象に同化し、若しくは對象其的と我と同一樣なることを直觀融會して、小なる我を對象其的としての大なる我に歸命同化し、彼我一体の威嚴成格を觀照發顯せんとする信仰で在るが故に、均しく彼我一体を歸趣とする向上の信仰であります。

第廿九節　向下の信仰

向下の信仰とは、對象の那的たることを究明し、人類としてより以下の活動を爲しつゝある者の功徳を感謝するもので、必ずしも、我の彼に一致せんことを期するものではありません。

第一段　向下表徳の信仰

人類より以下の活働を爲しつゝある者は、山河草木禽獣虫魚等であります。然れども是れ同一神の分体に過ぎず、只人類より觀じて、その活動の人類に及ばずとするものて在奏。則ち人類には及ばずとするも、神の分身分体たるには相違ない、且たゞのいかに人類に及ばずとするも、彼等は人類の生活に均しく關聯裨益しつゝある者なれば、之を輕蔑して、是れ山河草木ぢや、禽獣虫魚ぢやと、さげしむ者てない、同一の神の分身分体として活動しつゝ、人生宇宙に貢献しあれば、之に相對して、其的應分の徳を認め、其活動を歌ふて、其徳を讃美するのてある、之を向下表徳の信仰とは申します。換言すれば向下相對の信仰のことてあります。

第二段　向下劣等の信仰

對象の何物たるをば究明せず、更に對象其の的と我との一致するとを期するにも非ず、狐狸でも何でも、唯其恐怖の念より之を拜し或は一種の小慾望を充さんが爲め無暗矢鱈に、之に哀求する所の信仰てありまする、是は最も劣等なる信仰て在奏。

第三十節　他律的信仰

これは所謂他力信心てありまする、即ち　天御中主太神のみを眺めて、我等は太神より發顯れたるものなれば、我等の一舉一動は、悉く太神の支配し玉ふ所てある、我としての力は少しもあることなし、我としては何事をも成し得るものてない、善をなすも太神の命なり、惡をなすも太神の命なり、我に善をなさするは太神の我を賞し玉ふによる、我に惡をなさしむるのは太神の我を戒め玉ふによると共に、凶事の來るは太神の我を罪せらるゝなり、吉事の來るは太神の我を賞し玉ふなり、生るゝも太神の我

を生れさせ玉ふ者にして、死するは太神の我を他の境に導き玉ふなり。我は生るゝより、死に至る迄、一に唯太神の命のまに〳〵行動じて、早く其の太神と一致たらんことを期するばかりなり。其の期するも亦我の期するに非ずして、太神のまに〳〵我を導き玉ひて期せしむるのであります。死あれば生あり、凶事あれば吉事あり、生と言ひ死と言ひ、吉と言ひ、凶と云ひ、皆これ太神の威厳として發顯するものなり。死も生も吉も凶も、唯、其の境遇に應じての死なり、生なり吉なり凶なり、今日苦しむも其の苦は明日の樂なり、昨日の樂みも今日の苦みとなる　凶あればとて恐るゝに足らず、吉あればとて喜ぶにも足らず、我等は唯その境遇に應じて、其の境遇のまに〳〵戒身しつゝ通過すべきものなり、通過するも、我の通過するにあらず、太神より通過せしめ給ふなり、此の世界を通過して、の後は、太神と一致することを得らるゝものなるが故に、我等は唯、太神の命のまに〳〵此の世を通過せしめられつゝ、太神の大稜威を感謝するのみ。その感謝するも、太神の感謝させ給ふなりとぞ安立するなり。是れ全く太神と云ふことのみを眺めて、太神の命令の中に立ち、心を安んじ體を安んじ心体一致の安身を爲し、其の間には全然自己と云ふとを認めざるものであります。これ自己なきの自己たる太神となりて安身するのである。此の安身を他律的安身とは申します、世に云ふ他力信心であります。

第卅一節　自律的信仰

これは自己のみを認めたるものにして、別に太神なるものを認めないのであります、即ち自己を以て直に神なりとし、神を自己なりとして行動するものであります。我は太神より發顯したるものなり、我は直に太神の發動体なり、神なり、自己としての神より外に、自己を制裁する者なし、生れ來るも自己なり、死し去るも自己なり、善をなすも自己なり、惡をなすも自己なり、吉事の來るも、自己の之を招くなり、凶事の來るも、自己の之を招くなり、勤むるも自己なり、怠るも自己なり、自己の外には亦何的も自己を制すること能はず、自己を制するものは自己のみ、自己は思はんとする所を思ひ、言はんとする所を言ひ、行はんとする所を行ふ、自己の欲する所は、何

事も能はざる事なし、人生宇宙、如何なることにても、時間と空間とを打ち破り行かばやがては大本體神たることも亦難さにあらざるなり、自己は自己を信仰するより外、又何的か信仰すべきものあらんや、自己は是れ神なりと自覺實行するものであります、之を自律的の安身と云ふ、世に云ふ自力信心であります。

第三十二節　他律中の自律信仰

これは太神を認むると共に、自己を認むるのであります、然れども。太神に對立しての自己と云ふにはあらずして、太神中の分身たる自己としての自己を認むるのであります。假令ば吾身は太神より發顯したるものである、故に太神よりの支配を受くるものなり。然れども、太神より分身分体したる自己なるが故に、太神としても、其の分身分体には、其れ相應なる本能を賦與してあるものなるが故に、其の賦與せられたる分身分体は、其の分身分体相應に其の本能を活動すべきの責任を有するものなり。太神も亦其の分身分体の本能を否定することは出來得ぬものなり。若し太神にして、之を否定せらるゝものとせば、太神其の的の大本能も發顯すること能はざるに歸着致します。故に太神より發顯したる自己は、自己としての本能を發顯せねばならぬなり、即ち大神の中の分身分体としての其の本能を發顯するの責任あるとは明瞭て在矣。故に生るゝも死するも、吉も凶も、總て太神の命なれば、其の命のまに〳〵我等は歸依しつゝあらねばならぬと雖も、其の歸依する中にも、我等は我等としての本能を發顯して、善は爲すべく、惡はなす可らず、生は全ふすべく、死は避けざるべからず我等の成し得る限りは、善をなし惡を斥け、死を避け生を全ふすべく、是れ自己の本能なり、自己の責任也。若し我等の本能にて、善なすこと能はずして惡に陷り、生を全ふすること能はずして死することありとせば、是れ我等の力の及ばざる所なり、其の力の及ばざる所は如何ともなすべからざるなり、悉く之れ太神の命なりとして安身するものが、即ち他律中の自律信仰であります。

第三十三節　自律中の他律信仰

これは、生るゝも我の生るるなり、死するも我の死するなり、善をなすも我なり、惡をなさゞるも我なり。然れども善をなさんとしてなす能はず、惡を避けんとしても惡に陷り、生を保たんとしても保つ能はず、死を厭ふも死せざるべからざることあり。自己の力としてのみ、自己を處置することが出來ぬなり、其の出來ざるは、自己としての本能が、未だ其の全き質と量とを有せざるによるからである。故に其の全き的は太神なり、我としての全身たる太神なり、今の我は、小なる我なり、大なる我としての分身分体なり、今の小なる我としては、全き我に達せざる可らず、大なる我に到達せざるべかず。其の到達するは、我れ能く勵みに勵み、勤めに勤めて。時間空間を打ち破りつゝ實行するにあり。然れば其の全き大なる我としての身に達することを得るものなり、即ち全き我たる太神としての大本體となることを得るものであると云ふにあり。これ自律中に太神と云ふ他律の標準を定めて自覺實行する者であります、之を自律中の他律信仰と申すのであります。

第三十四節　信仰と人生の行道

他律信仰にても、自律信仰にても、他律中の自律、自律中の他律信仰にても、何れも歸着する所は同じきことでありまする、唯、踐み行く所の道こそ異なれ、登れば同じ高峯の月であります。唯男女老幼賢愚強弱等の動念動機それ相應に、均しく太神を標準として、人生に處し、宇宙に處さぬばならぬ次第であります。そのいづれにしても太神と云ふ信仰、太神と云ふ標準は、除くとは出來ません。是れ實に人生宇宙の根本大極でありますから、之を忘れては、其人に絶對の慰安、相對の慰安があるものではありません。故に人にして、此の信仰、此の標準なかりせば、其の人の行動は決して人世の模範とするには足らざると共に、其人自らも其の人としての成格の模範を世に發顯することは出來得ざるものであります。人々大に此の點に向て大覺悟大實行せられんことを望む次第であります。

茲に注意すべきは、向下劣等なる信仰の取るに足らないことは申すまでもないが。自律の安身に於て、根本の太神を信せないでは、悪を爲すも神なれば、自己の悪を爲すは、自己としての神の所爲にして、均しく神たるの道であると云ふ危險に陷ります。他律の安身に於ても、善を爲すは太神の爲さしむるものなりとせば、悪を爲すも那なりとせば、悪を爲すも太神の爲さしむる者なり、悪を爲すも太神の爲さしすることを勘からざるに至ります。今日迄の宗教にては、善を爲さしむるは神なり佛なれども、悪を爲すは自己なりと戒めてあります、さりとは純粋なる他律安身とはならぬてある。然れば純自律安身、純他律安身としては悪を爲すも可なるかと云ふに、左様ではない。之を説明するには、尚、仔細に總ての安身を批判して對論せねばなりませんが、それは近日發刊する所の「安身立命宮」に委しく説明してあります。更に全神教としての安身を以て人生宇宙に處し、猶然猛然、各自相應の本能成格を天照活躍して、分分の天職責任を何等の顧慮なく恐怖なく實行すべきことを勸告致してあります。抑も全神教の安身としては、自律のみてはありません、他律のみでもありません、自律中の他律でも、他律中の自律でもありません、自力てなく、他力てなく、妙力てなく、力とし云へは全力、律とし云へば全律てあります。全神教の安身としては、全力安身、全律安身てあります。茲にはその委細を述べまする暇がないから、「安身立命宮」の出版になるまて御待ちありたし。この度は只安身としての段階を大別して、四柱丈示したに過ぎません。只、自律安身と他律安身とは、克く〳〵吟味究明した上てなくては自他を殘賊する恐れがありますから、それよりも、自律中の他律、他律中の自律にて、いつれとも各自に相應する所に順じて、その安身を御定めありたし、是れ亦全律安身中の一律なれば、歸する處は全律安身に到達するものとなります。さすれば、是れ亦全神教としての全律安身と申しても差しつかへはありません。

且失れ執れの宗教宗義と雖、その最も向上の信仰に至りては、概して前述四種の安身中に過ぎません。さすれば、唯その對象の異なるのみにして、名稱の異なるのみにして、安身其的に變りはないかと云ふに、均しく之れ安身なれども、其の對象た

る神としての人生宇宙の大本體神として、直覺、思惟、解釋する大小高下精粗純雜等に依りて、その人生宇宙に處するの行動が大に異なる所の結果を釀します。人類、として萬有として、その人生宇宙に處するの際、この處が最も大切の公準大極であります、何人も忽にすべからざる所であります。大日本世界敎宣リ書第一第二」に於て、本体、とも得、亦悲しむべき人生ともなるのであります。

倘茲に一言せねばならぬとがあります。「大日本世界敎宣リ書第一第二」に於て、本体、現象、及、質と量との解釋を爲すに當り、當づその文字よ、訂正して意味に及ばねばならず、さすれば徐りに長篇となるか故に、只世間慣用の文字通りに慣用して、時時にこの度申上げたる意を示しつゝ他日に讓り者のてあります、本論「大日本世界敎天照太神宮」の出版せらるゝまではこの度の說明—本休—現象—平等—差別—質=量の說明を以て、全神敎としての本意なりと御思食して頂戴。而して宣明書第一第二は信仰の外容を說明したるものにしてこの度は其内容を說明したものと御承知ありてよ。且夫れ此度申述へたる中にても、一元說には種々の說あり、二元說にも多元說にも種々なる說あり、亦復長くなりますから、已むとなく省略致しました。委細は「大日本世界敎天照太神宮」に詳論してあります。

ざッと一口に話せとのことにて、その一口話が殆ど十五六日かゝりました、これてはまだ全神敎趣としての大日本世界敎の大略を述べ得たと云ふものてなく、ほんの一端を示したに過ぎません。先達發刊したる「大日本世界敎宣明書」と彼此御參看あらばその未だいづれも全きに達せずとも、幾分か全神敎趣大日本世界敎としての立義も御承知給はることゝ存じます。鈍根劣機至愚至痴なる凡兒であります故に、人生宇宙の消息を左樣手ッ取り早くに申述ぶるとは出來ません。さればとて、少しづゝても申述べなくては明かならず、凡兒としては遺憾中の遺憾てありますなれども、致方がこざりません。及ぶかぎりは逐次に「宣明書」と本論「天照太神宮」とを出版もし、更に御聞き被下候人人さへあれば、御話し致します位ではありません。この度はこれて一先づ御免を蒙りませう。

神とし申せば、人々、皆、神にて候べく。而も其神と云ふとは、啻に胸に秘め候て。先づ其神たるの實を行ひ候らへ。果して神たるの實さへ行ひ得候はゝ。其人自から生前に神呼ばりせず候とも。世は其の神たるの實に感動し、其人の死後には、必ずや、神として祠り可申候。更に、朝夕其神徳をも賛美可致候。あなかしこ。明治三十九年丙午夏六月十九日凡兒

大日本世界教要義第一巻了

明治三十九年七月十三日第一版印刷
明治三十九年七月十七日第一版出版

複製不許

大日本世界教要義奥付
正價金貳拾八錢

著作者 東京市下谷區三崎町十番地 川面凡兒

發行者 東京市下谷區三崎町十番地 新村寅次郎

印刷者 東京市京橋區大鋸町十四番地印刷所 北澤久太郎

發行所 東京市下谷區谷中三崎町十番地 稜威會出版部

大賣捌所 東京 海北隆館
東京 堂上屋田

既刊廣告

●大日本世界教宣明書

第一書第二書　正價壹圓
合本菊版　郵稅　二十錢

これは信仰、及、信仰の主體を始めとして、世界列國宗教哲學科學等の變遷發達より各國各自に感得したる主體名稱に及び、善惡美醜の關係とその發顯終結する經過を示し、更に宗教科學の一致すべき所以を論證し、個人統一、家庭統一、國家統一、世界統一、宇宙統一を逐次實驗的に證明し去り、天人萬有の活動終結する大道を發揚し、萬有安身の絶大活境を宣明し、三千年以前の舊思想舊信仰は三千年以前の過去に屬す三千年以後は三千年以後の新思想新信仰たらざるべからざるを喝破し、以て

東西古今の宗教哲學科學を總合統一し、茲に世界統一、宇宙統一の一大新紀元を建設したる者であります

興國の大元氣を以て世界列國と驅逐せんとする民族は、必ず讀まさるべからざる

振古無前の一大快書字字肉躍り　句句骨鳴り血あり涙あり、沈吟冥想の後には必ずや世界を睥睨し

乾坤を呑吐するの大國民たること必定であります。

發行所　東京下谷區谷中三崎町十番地　稜威會

●大日本世界教要義第一卷

四六判　正價二十八錢　第一冊　郵稅二錢

これは大日本世界教宣明書第一第二に於て未だ説明し及ざる所の**本體大本體の何ものたることの一部分を説明したので**固より未だその全きに達したものではありません然れども、在來の宗教哲學に於ける本體のそれとは大に面目を新にしたるものなること、讀者の首肯せらるゝことゝ確信致しますれば茲には改めて亦辨じませむ

●人道之制裁再版

クロース製　正價壹圓
金文字入美本　郵稅十錢

今日世道人心の**腐敗墮落**を救濟するは、經文聖典も亦益なし、唯、是れ熱烈壯快なる神法的辣手あるのみ、法律上より道德上より、宗教上より、更に個人として國家としての立脚より、然らざるべからざる理由を最も痛快に論辨考證したるもの。神刀鬼拳、電擊風發、一度ひ卷を披けば全身直に粟を生じて、夏日の苦熱を冷却寒殺するの概ありと知れ。

發行所　東京市下谷區谷中三崎町十番地　**稜威會**

大賣捌所　東海堂　東京堂　北隆館　上田屋

近刊豫告

●大日本世界教要義第二卷

これは「大日本世界天照太神宮」の英靈と天照太神との一部分を平易に談したものであります。然れども、在來の靈魂とは大に趣ります、**英靈**とは今日の言葉より云へば**靈魂**を異にして居ります、英靈活動の德を贊美すれば直に是れ**天照太神**であります、人體の組織を小天照太神宮とすれば、宇宙の組織は大天照太神宮であります、大小天照太神宮を客觀すれば大小英靈宮で、大小英靈宮を主觀すれば大小天照太神宮であります、この英靈と太神とを以て、いかに人生宇宙宮を組織しつゝあるが、天人萬有宮を發顯活動しつゝあるか、一讀快哉、直に生死を解脫し人生宇宙を横行縱飛し、何人も羽化登仙して亦人間にあらざるの太嘉樂を享受するであります。

●安身立命宮

これは「大日本世界教天照太神宮」中の安身立命宮の一部分を平易に講し、東西古今宗義學説に於ける安心を批判して全神教として大安身を示したものであります、東西古今宗義學説に於ける安心の欠陷を知ると共に、更に一道の大稜威に接着して千古未曾有の大安身を得、人生いかなる苦境に處するも、平然悠然として驚くことなく、一難毎に元氣百倍することを保證致します。

發行所　東京市下谷區谷中三崎町十番地　**稜威會**

●大日本世界教教儀

これは大日本世界教としての神典神儀神律を示したるものであります、全身のいかに爽快にして、動作のいかに嚴肅なるかは、一讀實踐の上にて實驗せられたし、人身修養法として、古今無上の神樂であります。

●大日本世界教宣明書第三書

宣明書第一第二は自家英靈の主動發達して個人を化し家庭を化し國家を化し世界を化し宇宙を化し人類を同化し萬有を同化して、本體大本體化するを説明したる者なれども本篇第三書は自家英靈の發達を期するには、他英靈の發達を期せざるべからず、三書は實に他英靈の發達を期し、その活動を贊美歎稱するものであります、いかに他英靈の發達を期しその活動を贊美すべきか、その間の消息は第一書第二書に對する反面としてそのいかに痛快豪壯なる甚深微妙なる、更に崇高幽玄なる一讀して乾坤絶大の珍書たる乎を知らるべし、

●大日本世界教天照太神宮第一棟

これは百棟あります、本篇は東西古今の宗教學説を批判して、更に人身の那物たることを生理上より理化學上より心理上より倫理上より哲學上より宗教上より、逐次明晳に論證して成程人身とは此の如きものかとの説明を最も痛快に與へたものであります、東西古今の哲學者、宗教者驚膽して顏色を失す

發行所　東京市下谷區谷中三崎町十番地　稜威會